

# TOTO

2010年 春号

Toward a Creative  
Architectural  
Scene

# 通信

特集

小屋は過激だ

Special Feature / A Form of Expression, The Cabin

“ほたるかご”

山の中腹に切り開かれた土地に立つ「ほたるかご」。旗は戸外で開かれた舞踏の日の名残り。どこか古代の祭りの後のようなイメージだった。

# は 過 激 だ

「ほたるかご」鈴木昭男	4	シリーズ 旅のバスルーム 77 文 スケッチ/浦 一也 モンドリアン(U.S.A. ロサンゼルス)	42
プラノBの発想と手法	8	現代住宅併走 14 文/藤森照信 竹原義二の「101番目の家」	44
「光の壁 イタクラギャラリー」樋口貴彦+志村真紀	14	最新水まわり物語 23 南アルプス市健康福祉センター	50
「Fred」Oskar Leo Kaufmann+Johannes Kaufmann	20	地域に生きる会社 50 タツミプランニング	54
「SAKAN Shell Structure」SSS研究委員会	24	ギャラリー 間で展覧会をします 竹原義二展「素の建築」	56
「XXXX house」原田真宏+原田麻魚	28	news file	58
「paco」長坂 常	34		
「四国八十八カ所へんろ小屋プロジェクト」歌 一洋	38		

「小屋」を問うとき、日本人の頭の中には、ただちに鴨長明、大愚良寛、松浦武四郎の極小の住居があざやかに浮かぶにちがいない。その極小の空間を日本人は詩歌書画音楽宴会のための小宇宙と見ていた。あらためて「小屋」を検証する。現代の小屋の多くは一見、目的意識を単純明解にしているように見える。しかし、その多様性をあぶり出していくと、各々の小屋に込められた思いはバラエティに富み、みごとにまで複雑をきわめている。様式、素材、技法、目的、ときには流通を意識した試みまで。小なるがゆえに、建築分野の外にあるものと位置づけられ、忘れられかねないだけに、その存在は強い興味を引く。個々の小屋の向かうところを検証し、過剰なまでの建築世界を味わう。

# 特集 / 小屋

## Contents

特集1 / エッセイ	土から生まれ、土に帰る
特集2 / レポート	自然素材と自力建設
特集3 / ケーススタディ	移築、再生、移築
特集4 / ケーススタディ	ロジスティックを戦略に
特集5 / ケーススタディ	左官シェルター
特集6 / ケーススタディ	パネル化の試み
特集7 / ケーススタディ	方丈の住居
特集8 / インタビュー	お遍路さんへお接待

# TOTO 通信

Toward a Creative  
Architectural Scene  
Number 490  
Spring 2010

Special Feature  
A Form of  
Expression,  
The Cabin  
Chapter

1



Essay  
Firefly  
Cage

セルフ  
ビルドの  
可能性を  
みる

特集／小屋は過激だ 第1章 エッセイ

土生土  
に生まれ、  
土に帰る

ほたるかご 設計／鈴木昭男

取材・文〇中原洋／写真〇山下恒徳／ポートレート〇給田能光



写真右ページ／版築の作業の跡が地層のように重なり、側板を留めた芯の木が壁から顔を出している。玄関扉の足下に空気抜きまであけられている。左ページ／光は天井からのみ。床は幅広の檜板。それ以外に何もない静謐な空間には緊張感があつた。

## ほたるかご

建築概要	
所在地	京都府京丹後市
設計	鈴木昭男
施工	セルフビルド
敷地面積	1000㎡
建築面積	36㎡
延床面積	25㎡
階数	地上1階
構造	版築構造
設計期間	1989年3月～
施工期間	1989年3月～ 1990年9月
外部仕上げ	丸太組み土葺き
屋根	版築壁のまま
外壁	版築壁のまま
内部仕上げ	野地板にペイント
天井	本格漆喰仕上げ
壁	檜板張り
床	檜板張り
総工費	30万円

「ほたるかご」と名づけられたこの小屋は丹後にある。セルフビルドによって建てられている。土を掘り、藁を鋤き込み、寝かせ、こね、ねっとりした泥を育て、2枚の板のあいだに押し込み、突き固め、乾燥させ、建ちあげられた「版築」の小屋だ。

建築に無縁の人が小人数で小屋を建てるには最適の技術といえるかもしれない。時間と我慢強ささえあれば建てられるベーシックな技術によっている。これこそまさに原型としての小屋の要素だ。建てたのは鈴木昭男さんと当時のパートナーのふたり。

鈴木さんは知る人ぞ知る音楽家。世界的サウンドアーティストのふたり。

版築という技術を採用するに至った理由を聞いた。じつは鈴木さんは名古屋の建築家に師事していたことがある。その折りの知識が役にたったのだろう。

小屋の目的は創作舞踊家のパートナーのための練習の場だ。

クローズドな土の壁は高さおよそ2m。彼女が跳んで手を伸ばして届くほどの高さ。斜めに丸太を置きながら組み上げた天井。中央に三角の穴。アクリルが蓋になって、ただひとつの窓となり、そこから光が降ってくる。丸太

組みが麦わら細工の「ほたるかご」に似るところからの命名という。小割りの板を屋根として打ち付けるのだけが大変だったという。なにしろ三次曲線のゆがみが出て釘で押さえなくてはならないから。

床は幅広の檜材。彼女が床を蹴って跳ぶと、太鼓を叩くようなあざやかな「ポーン」「ポーン」という音が外に漏れてくる。床下には3つの穴が坪状に掘られ、内部は鍔仕上げ。能舞台の床下の壺と同じ効果が引き出されている。もしかしたらこの小屋自体が楽器であったのかもしれない。

外観もシンプルそのもの。四角の箱、やわらかな曲線の屋根。土の壁には丹後の湿気がびっしりと苔を育てている。苔の上に光る水玉。

適正な技法、適正な設計から生まれたあざやかな小屋。内部も、外部も美しい。勝手ながらその美しさは目的への適正なアプローチの結果生まれた余録とでもいえるだろうか。

このプリミティブな、しかし完成された美しい小屋は、建てられたその瞬間から時々刻々、時間の変化を刻んでいる。訪れたとき静かに春の小雨が降っていた。弱い日差しと小雨が交互に現れて



写真右上／土壁の苔は降雨量の極端に多い丹後の湿気に育てられ、壁全体を覆おうとしている。苔の上に落ちた雨が表面一面に水玉を留めている。中／地層のよいうな土壁に、板を留めた芯の木が版築の作業の進行を示している。





版築は湿気の多い  
土地向きでは  
ないのかもしれない。  
でも、有機体の  
回帰を考えると  
大地にふさわしい  
建築技法といえる。

晴れたり降ったり。  
丹後の天気は変わり  
やすく、日差しがあ  
ってもしっとりとし  
ている。土地の言葉  
に「弁当忘れても傘  
忘れるな」というの  
があるという。

## Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Essay

は消えていく。土壁に生えた苔の上の水滴は雨に当たって消えては生まれる。自然の移り変わる表情を拾っている。そしてこの湿気は人影が消えたときゆっくりとした破壊の時間を進めていく。あるとき鈴木さんが語っていた。「1年間、ドイツに招待されているから、帰ってくる頃には土に帰っているでしょう」。消えることを期待して行われた建築行為。人を引きつけるのは、そのはかなさも関係しているかもしれない。あれから10年はたつ。電話で久しぶりに話した。「小屋はすでに土に帰りました」と。エコロジカルな視点からいえばこの小屋は有機的な活動の果てに、自然に戻った。

鈴木さんはあらためて自分が住むための家の建築を進めているという。人が捨てた廃材を使っているので「遅々として進まない」とも。目的が暮らすという多目的な家の完成はスピーディにはいかないものらしい。短期間のエネルギー集約で建ちあげられ、軽々と記憶の彼方へ消える。小屋はその流れがあつて美しいのかもしれない。

## 鈴木 昭男



Suzuki Akio

写真右ページ下／ど  
こか原初的な香りの  
漂う建物。その軒裏  
に御神酒とお札が置  
かれていた。土を捏  
ね生まれた作業の原  
点に、恐れと祈りが  
混じっているような。  
(写真提供／中原洋)

1941年平塚市（現朝鮮民  
主義人民共和国）生まれ。  
愛知県に引き揚げる。進学浪  
人中に建築家、牛山勉氏に師  
事。62年上京後、「音あそび」  
に転じる。エコーインストル  
メント「ANALAPOS」など  
の創作と発表を始める。「日向  
ぼっこの空間」（自然に一日耳  
を澄ます音のプロジェクト）  
京都網野 87-88、「ZZANA  
」の空間（ライン河公園計画  
／フランスのストラスブール  
2004）、「点音（oto-date）」  
（ソナビエンテ フェスティ  
バル 美術館島一帯に敷設）  
ベルリン 96、以来パリ、和  
歌山、ボルザノ（イタリア）、  
コーク（アイルランド）、トリ  
ノ（イタリア）、京都、ケルン  
などで展開、現在に至る。

# 自然素材と自力建設

## プラノBの発想と手法

私たちプラノBは、3人の建築家がパートタイムで参加する小さな設計事務所である。2002年に事務所を開設する前、アドベ (adobe 日干し煉瓦壁) を学習するためにアメリカに短期間滞在した。土で構築物をつくるには、アドベが最も有名な技法で、ほかの知られた技法として、ラメッド・アース (版築壁)、コブ (荒壁)、ワトル・アンド・ダブ (荒打ち漆喰壁) がある。ワトル・アンド・ダブをはじめとする土壁は、日本でも古くから伝えられてきた技法である。

## 土

壁はもともと世界各地に見られ、とくにアフリカ、アジア、南米で一般的な工法であったが、現代ではドイツ、ニュージーランド、アメリカといった国で盛んに行われるようになっていく。その流れは1973年の第 次石油ショックに関連した環境問題に端を発し、70年代に発展した。当初は石油の不足が深刻な問題とされたが、やがて化石燃料がいずれ尽きることで、それ以上に化石燃料の大量消費の影響が問題とされるようになった。影響とは、オゾン層の破壊と地球温暖化である。

石油が不足しようが大量消費されようが、建設という事業が多くのエネルギーを要することに変わりなく、化石燃料への依存の問題と無関係のほすがない。

工業製品でない自然素材は、化石燃料を必要としないことから、建築に用いる材料として重んじられるようになった。しかし、一部の研究実験的な試み (たとえば Auroville Earth Institute \*1 や CRA Terre \*2)、草の根運動 (たとえば Intentional Communities \*3) として前述した低開発地域を除くと、自然素材は工業生産された素材と組み合わせでなければ建設に使われることがなかった。これは法律上の制約によることもあれば (ドイツ、ニュージーランド、ニューメキシコ州)、現状行われている工法との関連性によることもあるが (ポルトガル、イ

Special Feature  
A Form of  
Expression,  
The Cabin  
Chapter 2



Report

タリア、アメリカ)、建築デザインの考え方から発する興味深い事例もある (たとえば Rick Joy \*4 や Martin Rauch \*5)。

## 土

などの自然素材に関しては、建築材料として扱う動きとは別に、概念的、美学的、批判的な用方をしようとする試みもある。それはアートの分野にもあれば (モノ派とかランドアート)、少ないながら建築デザインの分野でも行われてきた (Smidjan Radic \*6 や R & Sie \*7)。

ところで土は建築材料として用いられると必然的に工業製品と同 視されることになる。強度を増したり質をよくするために土を石灰やセメントやアスファルトと混合するからではなく、組み合わせで使われることによってもそうなるのだ。たとえば土にアスファルトを混ぜるのではなく両者が組み合わせで使われる場合でも、土は工業製品になるのである。

## な

るほど土などの自然素材は、建築用材料として強い存在感をもってきている。それはどこかつかしさを誘い、親しみを感じさせる。けれども工業製品もまた強い存在感をもっていても確かである。それは新しくて比類のない美しさを伴っている。21世紀は、テクノロジーの使用をいかに抑制するかを競うのではなく、テクノロジーのより好ましい使用を競う時代である。つまり、より知的で、より協動的で、より環境にやさしいテクノロジーの使用を競うのである。テクノロジーが消滅することなど、ありえない。

この自然素材と工業製品の組み合わせのほかに、私たちは専門家ではないボランティアの参加による建設を大事にしてきた。ここに私たちの考え方を表す3つの構築物を紹介する。

\*1 <http://www.earth-auroville.com> \*2 <http://terre.grenoble.archi.fr>

\*3 <http://www.ic.org> \*4 <http://www.rickjoy.com>

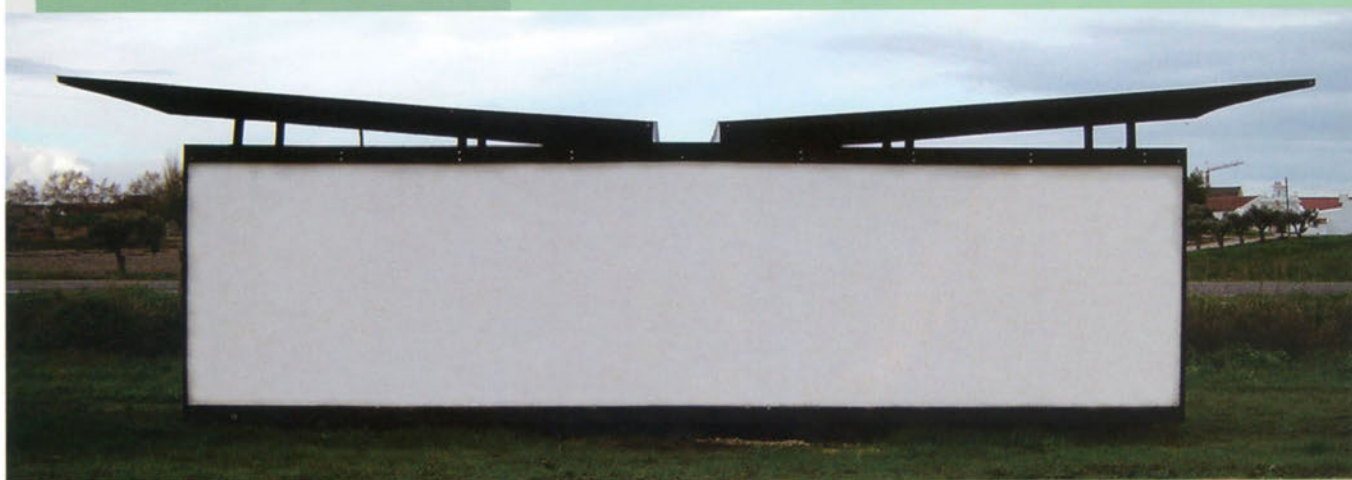
\*5 <http://www.lehmtonerde.at> \*6 <http://www.chilearq.com/web/proyectos/42>

\*7 <http://www.new-territories.com>





都市化の波が打ち寄せる田園地帯の歯止めとして



建築概要	
所在地	Alcochete, Portugal
設計 施工期間	2004年~2005年
延床面積	24㎡ (1棟)
おもな仕上げ	屋根/波型鋼板 壁/漆喰 床/砂利
施工	セルフビルド

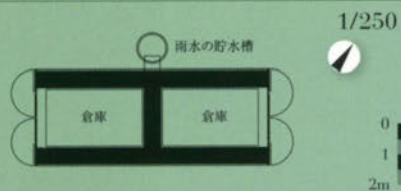
## 地元の藁と漆喰と砂利のセルフビルド

18区画に分けられた敷地に9棟建てられた倉庫のひとつ。

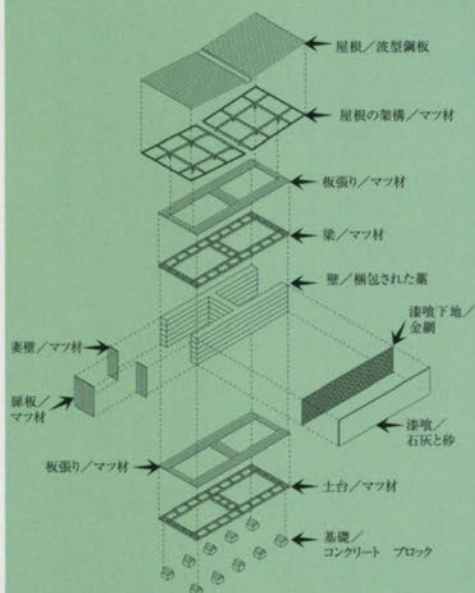
### 作業工程



### 平面図



### アクセシビリティ



この計画は、敷地のマスタープランを手がけた建築家リカルド・エスピリト・サントと私たちの協働による。かつて田園地帯であった帯は、現在では都市化の波が押し寄せていて、この計画にはその歯止めとしての役割が求められていた。なお、このあたり 帯は第3セクターの機関によって環境保全が講じられている。

敷地全体は1万2000㎡で、それが300~500㎡からなる18区画に分けられ、それぞれの区画には小さな倉庫が付設される。そのほか共通施設として貯水槽、風力揚水ポンプ、用水路、堆肥置場がある。それぞれの倉庫には屋根面からの雨水を貯める小さなタ

最 初の1棟は、建て主側のふたりの協力を得ながら、私たちが建設したが、残りの8棟はそのふたりが求職センターから募った人々を指揮して完成させた。そのうち、建設工事の経験者はただ 人であった。

倉庫の建設には現地で容易に入手可能な材料である藁を梱包したものを用いた。梱包された藁は壁を形成し、屋根を支えている。コンクリートブロックを列状に並べ、それを基礎としている。壁の上下には木材の梁と土台が通されているが、この定形の木材は建設の効率を格段に高めるために考えられたものである。

# ガラリーノ種の馬小屋

「Carrano's House」

絶滅危惧種の馬、ガルンチヨのための小屋



## ポ

ルトガル北方の野生地に  
生息するガラリーノ種の馬  
は、今では絶滅の危機に  
ある。そのガラリーノ種の、すでに  
家畜化された親から生まれた10歳  
の牡馬「ガルンチヨ [Carruncho]」  
のための小屋を建てる計画。

敷地は北向き、1・5 haで、オ  
ーク、マツ、オリーブの木が茂る  
場所である。馬小屋はかつての段  
段畑の 段分を占めていて、3つ  
のエリア、すなわち道具の物置、  
干し草置場、馬房からなっている。  
構造体にはほとんど現地産のマ  
ツ材を使っている。馬房の壁には、  
水、粘土、藁、木片を混合した軽  
量土を使い、断熱・蓄熱性能の向  
上を図っている。基礎は現場打ち  
コンクリート。通路となる部分以  
外のところには半透明の防水シー  
トが張られている。屋根の雨水は  
樋を伝って飲料水タンクに集めら  
れる。

建設が終わって、「ガルンチヨ」  
が入ることになった。彼は新居を  
入念に、満足げに点検した後、外  
に出て古い桜の木の下に立ち、そ  
こで 夜を過ごした。



Photo B

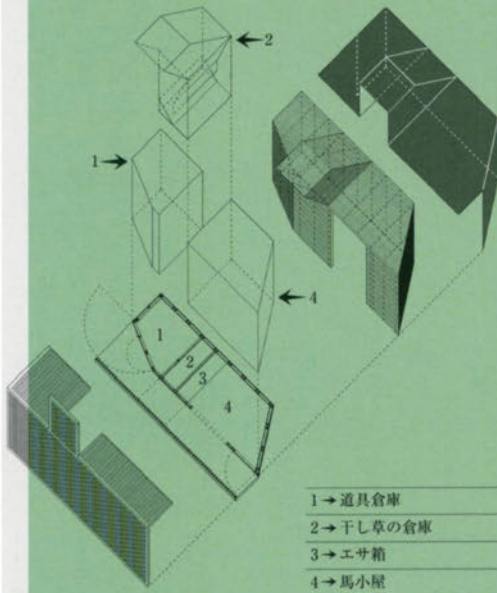


## ガラーノ種馬小屋

### 建築概要

所在地	Ourém, Portugal
設計 施工期間	2008年～2009年
延床面積	35㎡
おもな仕上げ	屋根／半透明の防水シート 壁／木材 床／現場打ちコンクリート
施工	セルフビルド
総工費	5,000€

### アクソノメトリック



- 1→道具倉庫
- 2→干し草の倉庫
- 3→エサ箱
- 4→馬小屋

### 構造体は 地産の マツ材

右ページ上／通路を歩くガルンチョ。左／東側から見た馬小屋。右ページ下右／通路以外の居住部分には半透明の防水シートが張られている。下中／扉を閉じたところ。左ページ下／馬小屋の室内の様子。



写真右／防水シートが張られた南側からの全景。屋根の雨水は樋を伝って飲料水タンクに集められる。左／通路に立つガルンチョ。



# 土の円柱

“Earth Columns”

地域社会を団体の活動に巻き込む仕掛けとして



写真上/円柱は藁を混ぜた現地の土、屋根と破風は現場の木材、その上に半透明の防水シート。基礎はコンクリート製の下水管で、これと屋根とが円柱の内側を貫くスチールの丸棒で緊結されている。

現地の土、  
現場の木材、  
地元の若者との  
協同作業

## 作業工程



の計画は私たちと、地元  
の若者たちの文化サークル「バラフンダ Barafunda」の協働による。「バラフンダ」は敷地を農業やスポーツなどさまざまなアウトドア活動に利用している。今回の建設の目的は地域の人々をサークルの活動に巻き込んでいくことであった。

建設の場所は小川が横切るマツとオークの森の画。小さなマーケット、展示、コンサート会場として使えるような開放的なパビリオンをつくることが意図された。デザイン・ソースはふたつ。ひとつはミース・ファン・デル・ローエの「ファンズワース邸」(1951)、もうひとつは坂茂の竹格子シエル構造。屋根は後者にならってつくられた。

材料としては、円柱は藁を混ぜた現地の土、屋根と破風は木、それに半透明の防水シート。基礎はコンクリート製の下水管を転用。円柱の芯にはスチールの丸棒がセツトされ、基礎と屋根面を緊結している。

私たちは円柱をつくるためのワークショップを何回か開催した。実際の建設はボランティアの手で行われ、7日間で終了した。

Photo B



## “Plano B Arquitectura”

Plano Bとは、予定されている第1案に替わる案を意味するものである。それは主案が不採用となった場合に起用されるものだ。Plano B Arquitecturaは2001年にスタートした建築家チームで、自然の材料および工程と、工業的な材料および工程を組み合わせ、建築設計と建築模型の制作を行っている。木材 土 藁と、スチール プラスチック コンクリートを共に用いることは、工業化された状況におけるエコロジーの倫理的、社会的、経済的側面を私たちに考えさせてくれる。Plano B Arquitecturaは、とりわけ土の建築への関心を共有する建築家集団であり、それを現代に再現するために伝統的な建築技術を用いた解決策を模索している。

### エドゥアルド・カルヴァロ

1974年ルアンダ生まれ。92~98年ポルト大学建築学科 (Faculdade de Arquitectura da Universidade do Porto) に学び、建築士資格取得。



Eduardo Carvalho

### フランシスコ・フレイレ

1975年バリ生まれ。94~2000年リスボン工業大学建築学科 (Faculdade de Arquitectura da Universidade Tecnica de Lisboa) に学び、建築士資格取得。



Francisco Freire

### レイス・ガマ

1974年リスボン生まれ。94~2000年リスボン工業大学建築学科 (Faculdade de Arquitectura da Universidade Tecnica de Lisboa) に学び、建築士資格取得。



Luis Gama

### おもなプロジェクト

●「サムーコ塩田 (Salinas do Samouco) の農業用倉庫」(2004) ●「ホームランド (Homeland)」(07/ヴィラ ノヴァ・デ・セルヴェイラ/http://planob-cerveira.blogspot.com) ●「編み枝、泥と漆喰の家 (Wattle and Daub House)」(07/Arruda dos Vinhos/http://planob-arruda.blogspot.com) ●「土の円柱 (Earth Columns)」(08/ベネディタ/http://planob-barafunda.blogspot.com)

www.planob.com

## 終わりに

これら3つの構築物は、長く保たれ、さらなる発展につながることを期待された。実際はどうであったか。農作業用倉庫は、完成後しばらくして放棄されてしまった。土の円柱のパピリオンは状態がよく、今も使われている。そしてガラノ種の牡馬「ガルンチョ」は伴侶を得た。どれが幸せを得たといえるだろうか。自然素材と接していると、この世に確かに生きているという実感を得られる。一方、工業製品と接していると、一個の人間であるという確かな意識がもたられる。私たちは個人主義がきわまり、産業化が進み、化石エネルギーに依存する世界に暮らし、公私両面の要求をもちつつ生きる生命体であると認識すること、それこそ、建築の本質にほかならない。

“Earth Columns”

### 土の円柱

#### 建築概要

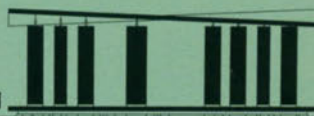
所在地	Benedita, Portugal
設計 施工期間	2008年~2009年
延床面積	45㎡
おもな仕上げ	屋根/半透明防水シート 柱/土 床/現場の木材
施工	セルフビルド
総工費	2,500€

### 立面図

1/300

0  
2  
4m

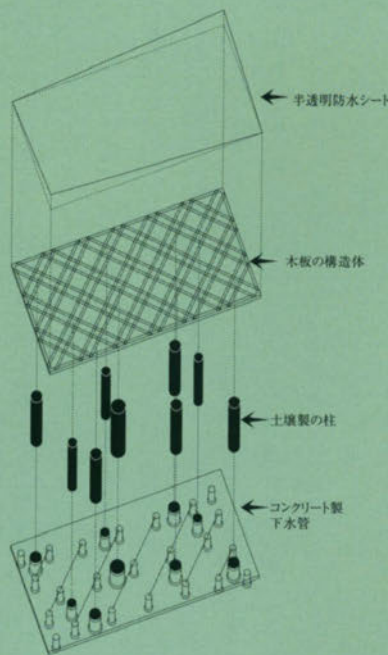
#### 正面図



#### 側面図



### アクソノメトリック



# 移築、再生、移築

## 小屋から表現への試み

八ヶ岳山麓に100年以上前に建てられた板倉が、5年前に筑波大学のキャンパスに移築・再生された。壁の中ほどには廃棄ガラスを半溶融し、粒状構造体として成形した「Re-glass」のブロックによる光の壁がつけられた。名づけて「光の壁 イタクラギャラリー」。

取材・文=豊田正弘/写真=藤塚光政

带状に積まれたRe-glassのブロックからほのかな光が入り、板倉の古材を照らす。床からの高さは約1.4mで、アイレベルを意識して決められた。



「光の壁 イタクラギャラリー」





右写真2点/出自の異なる素材が、同じ形で共存している不思議さ。そしてRe-glassは、日射の有無によりまったく違った表情を見せる。井桁の先端が氷河の断片とも見紛う一方、枯れたつる草の下でひっそりと息づいている。

Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Chapter 3



Case Study 1



写真左/深い軒をもつ「小屋」の西面に、午後の日が当たる。壁を構成する厚板は、厚さ約150mm、幅約90~120mm。この板倉は各段の一周が同じ高さだが、入手できる材料によってはバラバラなものを調整して積んでいるものもある。ここに見る姿は、「故郷を離れた板倉は、文化の『伝達者』の運命をたどる」と言う樋口さんの言葉を実感させる。

## 移築され 使いつづけられる 小屋

つくば駅からのタクシーで筑波大学の広大なキャンパスへ向かう。「雑多なモダンズム」としかいいようのない建物群を抜け、「このあたりだと思っけ」と小道に入ると、ごく控えめにその「小屋」は姿を現した。冬の草木に埋もれているかのようだ。「光の壁、イタクラギャラリー」は、八ヶ岳山麓に100年以上前に建てられた板倉を、5年前に移築再生したもの。当時、筑波大学博士課程に在籍していた樋口貴彦さんの仕事だ。そして建物の特徴づけているのが、壁の中ほどをめぐるガラスの帯。廃棄ガラスを半溶融し粒状構造体として成形した「Re-glass」のブロックで、同博士課程の学生だった志村真紀さんが製作した。時を隔てながらも再生された素材、そして研究分野を異にする設計者の出会いが、ユニークで魅力的な小屋を生み出した。樋口さんからお話をうかがう。

移築した板倉は井籠造り<sup>せいろ</sup>で、カラマツやアカマツの厚板を井桁に組み、タボで上下をつないで四面の壁を積み上げている。一段ごとに材同士の仕口を加工する、とても手間のかかる構法だ。著名な正倉院(校倉)のほか、国内外のとくに山岳地帯に多く存在し、柱梁で構成された木造とは別のDNAをもつ。八ヶ岳山麓のそれは、そのつど入手できた地域の材料を使い、近世と変わらぬ技術でできている。そうした背景と、シンプルなもの積み重ねた力強さに樋口さんは引かれたという。おもしろいのは、倉とはもともと食料や





家財道具を貯える建物だが、倉自体もまた暮らし向きにより売買され移築されるものだったこと。この3坪程度の小さな倉も、八ヶ岳周辺の集落を何度か移築されてまわっている。それは小屋の本質的な姿だ。

また厚板は調湿性能がみられるが、このままでは貯蔵庫としての性能は最低限に留まる。外側に土を塗ると気密性能が飛躍的に高まり、内部の温度は一定になる。しかし、壁に無数の小さな杭を打って下地にし、土の下塗り・中塗りをし、仕上げに漆喰まで塗るのは経済的に負担が大きい。代では終わらず、工程途中で次の世代に託すことも多い。山麓にはさまざまな仕上げ段階の板倉が散在し、土塗りに売られて移築されることもある。さらには倉にはセルフビルドの箇所もよく見られるという。

身近にある材料を大切に使い、持ち主の手が届く技術でつくりつけていくという形は、今日的なエコロジーの精神をはるかに先取りしているように感じる。またカラマツは戦後に植林され伐採期を迎えているが、構造材としての強度はあるものの、ねじれるため使いづらい。こうした小規模な建物の存在は示唆に富むのではないだろうか。



Re-glass による  
ブロックの詳細

廃棄ガラスを半溶融してから焼成し、普通板ガラスの15~30%の圧縮強度を得た。躯体が軽いため十分な値。中央に透けて見えるのはダボ。

# くるり一周した光が 移築から表現へ

さてこの板倉、樋口さんはその3年前の集落調査の折に発見し、研究対象として解体・組立を思い立つ。ひとり暮らしの家主さんが亡くなられたため譲り受ける話が進み、キャンパス内のサービス施設として移築することになった。

そこで問題になったのが開口部だということ。もともと窓のない建物だったが、展示空間としての使用も想定すると自然光を入れたい。また古木の風合いに負けない素材を考えていたとき、志村さんのRe-bassに思い当たった。傷んでいた壁材の一段を抜き取り、6種類デザインしたRe-bassのブロックを新たにつくったタボで固定し、木と同様に積み上げる。斧で研られ日焼けした板の外部にはガラス粒の凹凸が残る面を、鉋で

仕上げた板の内部にはなめらかな肌理の面が合わせられた。

実際に小屋へ近づくと、遠目にはただのストライプに見えていたガラスの異様さが際立ってくる。つねに「割れ」を意識させられるガラスが、木と同じ井桁の形状を取り、そこから上の壁・小屋組・屋根すべての荷重を受けているのだ。上下をつなぐタボが透けて見え、建物の仕組みを暗示する。ひび割れたような素材感もあいまって、背筋が伸びるような緊張を感じさせる。

ところで板倉の解体は学生の加わった手作業により、屋根を除く躯体は10人がかり1日で終了した。つくばでの組み立てはゆつくりと行われたが、同様の人数と日数でも可能。システムティックに進行できた作業から、移築・再利用をあらかじめ意図した建物のつくりを体感したという。

工費をたずねると、市販の物置を購入するはずの予算をいただいた10万円、プラス

自腹の10万円で計20万円。Re-bassは志村さんと共同研究をしていたクリスタルクリエイ社からの提供。若さと情熱を感じさせる、いい話ではないか。

今のところこの小屋、残念ながらギャラリーとしては使われていない。移築直後から椅子・テーブルなど大学の備品がうずたかく積みまれ、小屋は本来の仕事を黙々とこなしてきた。今回苦労してそれらを運び出し、ようやく内部を見ることができた。

すると外観からの印象とは一変。午後の光がRe-bassにあたると、薄水色の幻想的な光が満ちて、古材の表情を優しく浮かび上がらせた。Re-bassを透過する光は、散乱し溜ってじつに不思議な質を獲得する。圧縮材としての緊張と、光を発する帯のやわらかさ。設計はその両面から、小屋のもつ原初的な空間性をみごとに引き出している。そして、この板倉が生きてきた膨大な時間の底力を見せつけたのだ。



写真上下/八ヶ岳山麓は冬の寒さがきびしく、霜が降りるのを防ぐため、軒を延ばした建物が多い。軒下で作業したり、物置として使う。移築前は、軒先に味噌蔵が続いていたそう。写真左ページ/芝屋根の土は、この敷地にあった小山のもの。オリジナルの置屋根形式を踏襲している。



Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Chapter 3

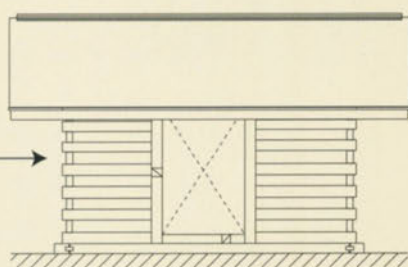
Case Study 1

1/100

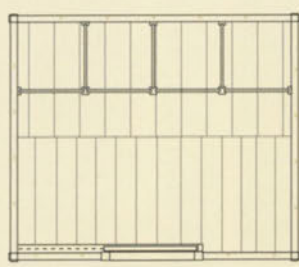
「光の壁 イタクラギャラリー」

Itakura Gallery

0 1 2m

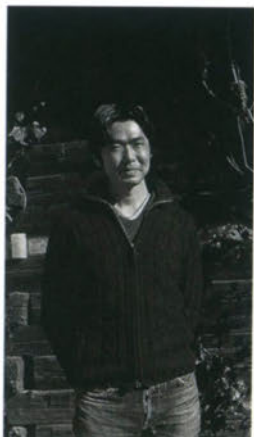


南立面図



平面図

設計	樋口貴彦+志村真紀
ガラスデザインおよび制作	志村真紀
施工	セルフビルド (協力=筑波大学安藤研究室)
延床面積	10㎡
階数	1階
構造	木造
施工期間	(解体)2004年5月 (再生)2004年5月~7月
人工	約90
総工費	20万円
搬送方法	トラック運送



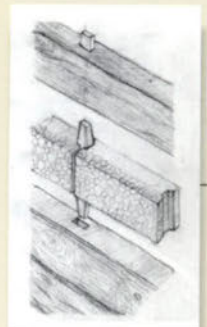
## 樋口貴彦

Higuchi Takahiko

1976年長野県生まれ。2000年東京学芸大学芸術課程芸術学 演劇コース卒業。01年けんちく工房にて大工補佐。03年筑波大学大学院修士課程修了。04～05年スイス政府給付奨学生として、メンドリシオ建築アカデミーに留学、ペーター・ズムトーに師事。05～06年Ruinerri Accociati (スイス) インターンシップ。08年筑波大学大学院博士課程修了。09年より東洋大学木と建築で創造する共生社会研究センター研究助手。おもな著書に『スイスと日本の山岳建築』（『山と建築』収録／監修＝土本俊和）、『ハヶ岳山麓における板倉構法の類型とその特徴』（共著／『日本建築学会計画系論文集』）

### 上下を厚板で挟まれた Re-glass のブロック

ダボは荷重を受けず Re-glass のブロックのずれを防いでいる。ブロック全体に均等な荷重がかかるようレベル調整に苦勞したそうだ。



# ロジスティックを戦略に

## 靴式の小屋

オスカー・カウフマンらによる3種類の移動住宅プロジェクトは、工場仕上げで、輸送を簡単にするため、すべてトレーラーにのせられる大きさとなっている。その最小の作品が「Fred」。たたんだ状態で $3 \times 3 \times 3$ mで引き出し型の拡張性のある部屋。

文=伊藤公文/写真=Ignacio Martinez



オスカー・カウフマンによる移動住宅プロジェクトは3種類ある。Fredはそのうちの最小で、たたんだ状態で $3 \times 3 \times 3$ mの立方体。写真は大型の引き出しのように3方の壁をスライドして拡張したところ。

Special Feature

A Form of  
Expression,  
The Cabin  
Chapter 4



Case Study

Part

2

設計 / Oskar Leo Kaufmann + Johannes Kaufmann

# 「Fred」

Portable House



# カ

ウフマン工務店はオーストリアのスイス国境近くの町を拠点としている。その業務内容は木工を基本としつつ、なかなか先進的でユニークだ。

一般的な工法による家の設計と施工を行う一方、木造プレファブにも積極的に取り組み、工場組立てのユニットをトレーラーで運び、戸建ての住宅から数階建ての大規模なホテルまでつくりあげている。内装や家具製作も手がけていることからわかるように、木工の技量は緻密で、かつデザイン・センスが洗練されている。無用な飾りがなく、プロポーションが美しい。時に目を疑うほど繊細ですらある。

1996年に開発されたプレファブの戸建て住宅は「SU-SU」シリーズと命名されている。コンテナ形状の基本ユニットを丸ごとトレーラーに積み、公道を運び現地ですっぽつする。部2階建て、ピロティ形式、複数ユニット組み合わせなど、さまざまなバリエーションがすでに存在している。

「SU-SU」シリーズから派生して99年に開発されたものが、ここに紹介する「Fred」である。木造プレファブ・ユニット、トレーラー運搬という点は変わらないが、移動性の

写真左／拡張したFredの室内。左奥にトイレ シャワーユニット、右手が奥行きのある幅の狭いキッチン。室内はすべて木製。



考え方がまったく異なっている。「SU-SU」のほうは恒久的な設置がもくろまれ、移設はほとんど考慮されていないが、「Fred」のほうは一時的な設置が第一で、移設を前提に設計、製作されている。つまり、可搬性、移動性、仮設性の色合いが段違いに濃い。

そのおもな用途は祭り、展示会、市場などのイベント時の仮設の店舗、作業場、オフィスが考えられる。

その要点はふたつ。

## ひ

1、体積で5分の1と小さく、軽い。注文から5週間以内に製作され、現地に運ばれ、2時間の工事で完成する。素早く、手軽。

もうひとつが、靴式とも称すべき仕組みである。外箱の内側にもうひとつの箱を差し込み、そのままの姿で小型トレーラーで運搬、現地で下ろした後、外に2本のレールを敷き、3×3×3mの内箱をそのレールにのせて引き出して完成する。運搬時の全長は4mだが、完成後は7mに伸びる。端部のトイレ・シャワーユニットとキッチンユニットを別にする、面積は9㎡から倍の18

㎡に広がる。上下水、電気インフラに接続すると最小限の住機能を満たすユニットが即時に完成する。

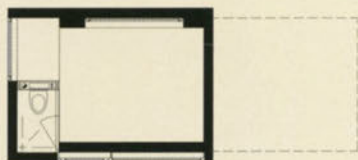
プレファブ住宅がいくら工場生産が進んでいるとしても、このように工場での箱の形状に組み立て、後は運ぶだけという方式はほとんど採られない。現地の条件の違いへの対応に融通性が少ないこともあるが、運搬の際の寸法や重量の制限が大きく、何よりも箱にしてしまうと半ば空気を運ぶようなもので、効率がよいとはいえないという理由も大きい。

「Fred」は、運搬の便宜と効率を重視した結果として製作されたものだろう。思えばモノを送ろうとするときには、複数のものをいかに上手にまとめて梱包し、体積を最小限にし、安定したこわれにくい状態にするかが肝要で、その点で靴式を採用した「Fred」には、理がある。家具や道具類を中に入れられることを考えると、さらに理があるといえよう。体積に比して大きな開口部には断熱、遮熱にすぐれたLow-Eガラスを採用したり、トイレとシャワーを兼用とするなど、使われ方を想定したうえで合理性を追求していることも記すに値する。

トレーラーから荷下ろし中のFred。たたまれた状態。現場では2時間の工事で設置が可能。



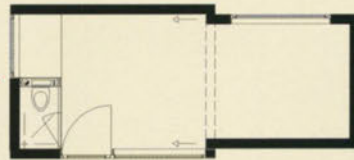
格納時



1/150



引き出し時



1/150





Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Chapter 4



Case Study 2



## オスカー・レオ・カウフマン

Oskar Leo Kaufmann

1969年オーストリア生まれ。95年ウィーン工科大学卒業。96年ヨハネスカウフマンのカウフマン96入社。97年KFNプロダクツを共同設立。2001年Arch.di Oskar Leo Kaufmann Zivil Techniker GmbH (有限会社)、05年Arch.di Oskar Leo Kaufmann/Arbert RUF Zivil Techniker GmbH(有限会社) 設立。

www.olknf.com

## 「Fred」 Portable House

設計	Oskar Leo Kaufmann+Johannes Kaufmann
製造期間	5週間
床面積	18㎡
部屋容積	58.5㎡
構造	木造
施工期間	クレーンで2時間

扉を付けたとき



2007年滋賀県立大学キャンパス内に建てられた実物大の実験棟。長軸6m、短軸3.6mの半楕円回転体を3m角の立方体で立体的に切断したもの。切断面はアーチ形の開口部となり、四本足のドーム状となる。

# 左官シェルター

システムとして  
伝統技術を  
生かす

伝統的左官技術を活用したシェル構造体からなる、自助建設型仮設住宅モデルの提案。大規模災害時を想定した仮設とはいえ、人の住まいである。その土地の文化や人々の思いを受けとめることができるような仮設住宅への思いが開発の動機となった。



基本形 →



特集 小屋は過激だ／第5章 ケーススタディ3

Special Feature  
A Form of  
Expression,  
The Cabin  
Chapter 5

Case Study

Part

3

設計／SSS研究委員会

「SAKAN Shell Structure」



Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Chapter 3



Case Study 3



# 大

規模災害の直後に現地に足を踏み入れた経験はないが、プレファブの仮設住宅が密集して立ち並ぶ光景を映像で見ると、応急的な措置として止むをえないと理解はしていても、家族揃って毎日暮らす場所としてはいかにも殺伐とした感じが否めない。それは国内外を問わず共通している。そうした状態に違和感をもっていた若手の設計者や研究者たちによって開発されたのが「SAKAN Shell Structure (以下SSS)」である。2年にわたる検討の後、2007年春に滋賀県立大学の敷地内に実物大の実験棟が建てられ、その2年後、倒壊実験が行われて壊された。

SSSの姿はとてもユニークだ。モルタルの非常に薄いシェルでできていて、表面は漆喰仕上げ、四方にアーチ状の開口。その形は長軸6m、短軸3・6mの半楕円回転体を3m角の立方体で立体的に切断したもので、平面3m角、高さ3mの4本足の

パビリオンといえばよいだろうか。これには尖ったところはもちろん、およそ角ばったところが見当たらない。どこかで見たという確かな記憶はないが、でも一度は見たことがあるような気もする、ほのぼのとした味わいをもつ、土着的で不思議な姿かたちである。さらにこれらが並び立って集落を構成するありさまは、岩場にフジツボが群生しているような、人工的な気配が薄く、自然界の出来事であるようなさまが思い浮かぶ。プレファブの仮設住宅群とは対極の、応急の暫定的な施設ではあっても、人が集い、暮らしていくのにふさわしいコミュニティの形成が推測される。

SSSの特徴は建設方式にあり、ユニークな姿かたちはあくまでもその結果である。建設方式とは、空気膜を型枠とし、左官技術を用いたセルフビルドにより無筋のモルタルシェル構造体をつくるというものだ。空気膜は特別にあつらえたものを用いる。

接地部を木製のベースプレートで固定し、土嚢で押さえた後、送風機で空気圧を高める。およそ20分で所定の圧に達する。四周に開口枠になる木製リブを設置し、全体に麻のネットをかぶせてモルタル接着面をつくる。これで型枠完成。

# 次

に簡単に入手可能なセメント、軽量骨材（バーライト）、水を適量混合し、補強材としてガラス繊維を入れてモルタルをつくり、鏝で空気膜の上に塗る。頂部で15mm、下方の脚状のところは構造の強度の必要から2度塗りして30mmとする。熟練者ふたりであれば4時間で行える作業だが、これを被災者が共同で行うことが想定されていて、これこそがSSSプロジェクトの肝といえる。共同作業が被災者にコミュニケーションの機会をもたらす、連帯感を生み、また住まいへの愛着をもたらす。それが被災による精神的、肉体的なダメージからの短期間での回復に大き

く寄与するともくろまれているのである。工場生産されたプレファブユニットを専門業者が組み立ててしまう現状の方式との最大の違いがここにある。

24時間経過後、空気を抜いて型枠をはずす。空気膜は何度でも転用が可能。これが無筋のモルタル薄肉シェル完成。空気膜を型枠とする事例は大スパンの貯蔵タンクなどで実用化されているが、それらは配筋がなされている点で異なる。外表面に漆喰を塗り、必要に応じて床や内壁を仕上げてもよく、開口部を膜材や布で塞いでもよく、頂部にトップライトや換気口を設けてもよい。

完全に非熟練者だけで全工程の作業を行うには、いくつかの検討課題が残っているとしても、セルフビルドの応急シェルターとして、ひとつの有力な可能性を提示したプロジェクトであることは確かだ。

写真上／開口部に透光性の膜を付けたもの。夜間（写真下）室内に明かりをつけると、この膜を通して内部の気配が外にもれる。中／実験棟内部は和紙で仕上げている。



## 小澤雄樹

Ozawa Yuki

1974年群馬県生まれ。98年京都大学工学部建築学科卒業。2000年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。09年工学博士。00～04年T.I.S&Partners。04～09年立命館大学理工学部講師。08年エスキューブ アソシエイツ共同設立。

## 森田一弥

Morita Kazuya



1971年愛知県生まれ。97年京都大学大学院修士課程修了。97～2001年京都「しっくり浅原」にて左官職に従事。00年より一級建築士事務所森田一弥建築設計事務所代表。07～08年ポラ美術振興財団若手芸術家在外研修員としてスペインに滞在。おもな受賞=02年「蔦」(00)で、JCDデザイン賞新人賞、06年「コンクリートポッド」(05)でアーキテクチャーレビュー誌AR AWARD 2006優秀賞、09年「シェルフポッド/君府亭」(07)で大阪建築コンクール渡辺節賞。



## 柳沢 究

Yanagisawa Kiwamu

1975年神奈川県生まれ。99年京都大学工学部建築第二学科卒業。2001年同大学大学院修士課程修了。03～08年神戸芸術工科大学大学院助手。08年工学博士。同年一級建築士事務所建築研究室設立。現在京都造形芸術大学非常勤講師、国立民族学博物館共同研究員。著書に「無有」(共著/学芸出版社)、「世界住居誌」(分担/昭和堂)、「京都げのむ」No.2、5、6(責任編集/京都CDL)、など。02年「SHELLTER」で第13回タキロン国際建築コンペティション2等、09年「斜庭の町家」で京都デザイン賞受賞。

## 山本直彦

Yamamoto Naohiko



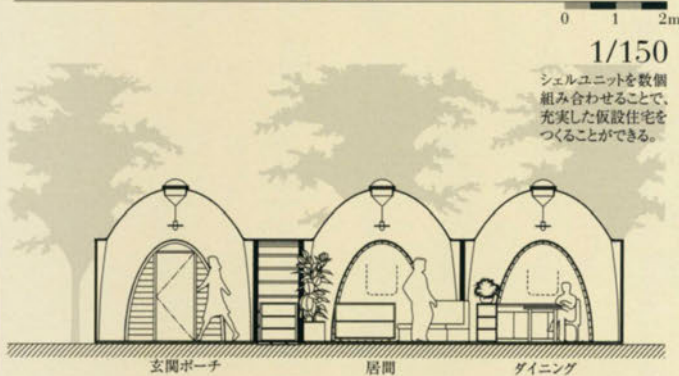
1969年東京都生まれ。94年京都大学工学部建築第二学科卒業。97年インドネシアスラバヤ工科大学留学。2003年京都大学大学院博士課程修了。工学博士。デンマーク王立オーフス建築大学助手、立命館大学専任講師、滋賀県立大学講師を経て、07年より奈良女子大学准教授。著書に「テキスト建築意匠」(共著/学芸出版社)など。96年日本建築学会優秀修士論文賞、04年日本建築学会奨励賞受賞。

## 「SAKAN Shell Structure」

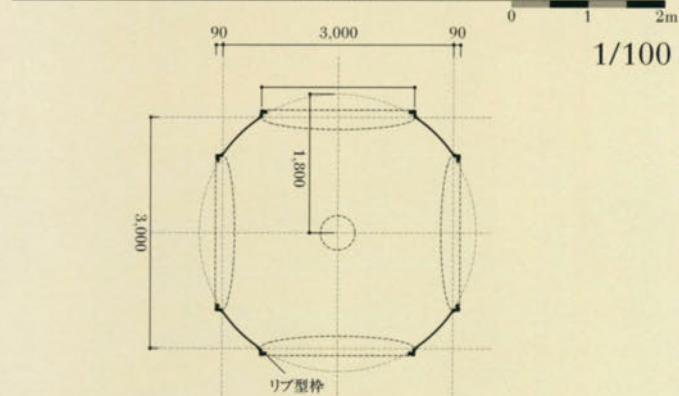
### 建築概要

設計・施工	SAKAN Shell Structure研究委員会
構造	小澤雄樹
構法原案 左官工法	森田一弥
設計 平面計画	柳沢 究
企画 全体統括	山本直彦
施工協力	小川テック 久住鴻輔/久住左官
実験棟所在地	滋賀県立大学構内
面積	8.6㎡
構造	無筋モルタルシェル構造
おもな仕上げ	漆喰・ロクタ紙・三和土 開口部付きテント膜
研究 設計期間	2005年6月～2007年2月
実験棟施工期間	2007年3月～5月(施工所要日数:8日間)
研究援助	住宅総合研究財団 立命館大学21世紀COEプログラム 学術フロンティア推進事業

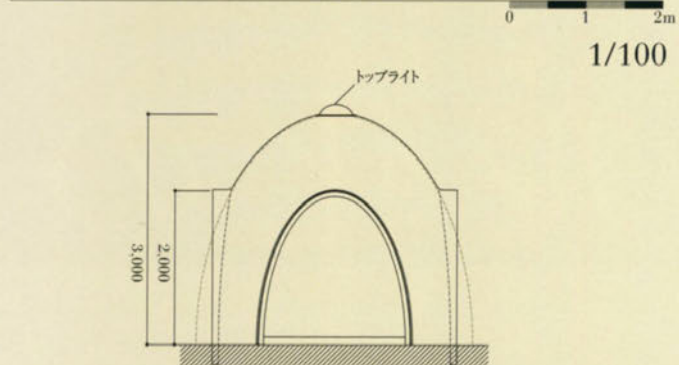
### 断面図



### 平面図



### 立面図



空気膜型枠の設置。



送風機で空気膜をふくらませる。



開口部枠となる木製リブ型枠の設置。

## SSSシェルユニットの施工プロセス

- Step 1 空気膜型枠をふくらませる。
- Step 2 麻製ネットをかぶせる。
- Step 3 左官工事によるシェル構造体の施工。
- Step 4 躯体養生と麻製ネット切り取り。
- Step 5 空気膜型枠の撤去。完成。

①空気膜型枠の設置。②モルタル下地となる麻製ネットをかぶせる。③左官工事によるシェル構造体の施工。④躯体養生と麻製ネット切り取り。⑤空気膜型枠の撤去。完成。



# パネル化の試み

超低予算、セルフビルドの陶芸小屋。組み上がった建築は木製モノコック構造による機能の複合化が、車の場合と同様に、建設費の低減、工期の短縮、工程の簡略化、建材量の最小化をもたらし、デザインの質をも決定した。

取材 文=加藤 純/写真=傍島利浩(33ページ写真をのぞく)

西側から見た室内風景。おもな構成材は天井、壁、床とも 900×1,800×12mmの構造用合板を4~5枚積層して張り合わせたもの。壁の傾斜角度は、模型に力を加えて検証し、確かめたという。

特集 小屋ほ過激だ / 第6章 ケーススタディ 4

Special Feature  
A Form of  
Expression,  
The Cabin  
Chapter 6



Case Study

Part

4

設計 / 原田真宏 + 原田麻魚

「XXXX house」



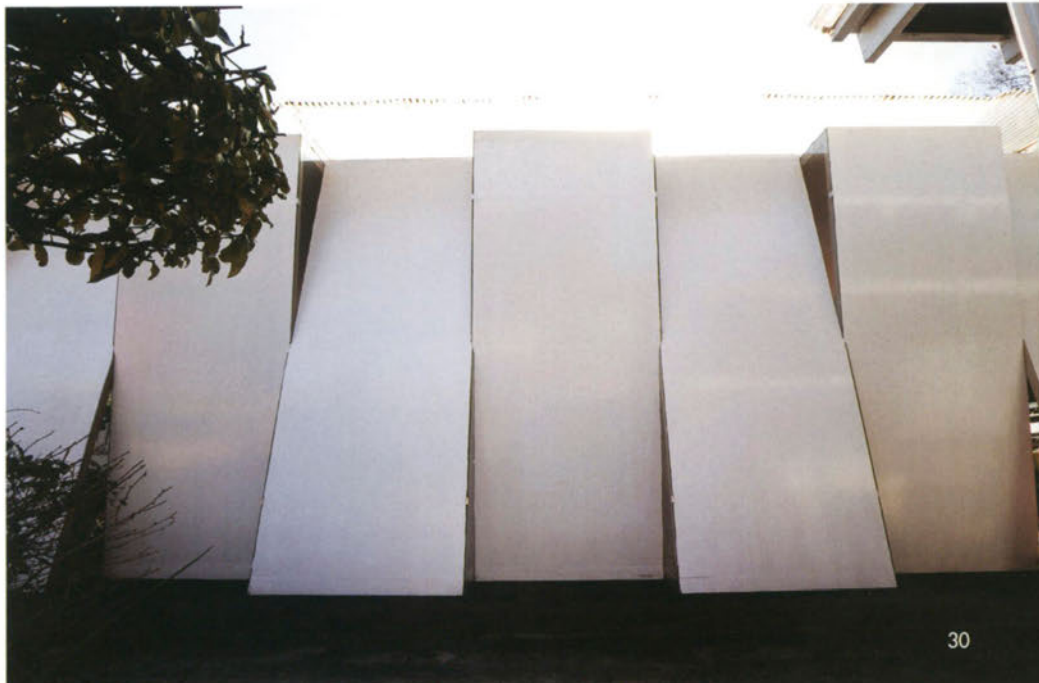
採光、  
通風、  
チューブ状の無柱空間でありながら、  
通風にすぐれるXフレームの組み合わせにより  
限りなく反復が可能である。



写真下／壁がクロスした部分  
にできる三角形のスリット。  
外側から6mm厚のフロントガ  
ラスでふさぎ、2カ所のクリ  
ップとシーリングで留め付け  
ている。左ページ下右 下左  
／室内側から見たところ。

写真下／北側側面。壁は構  
造用合板4枚、床は5枚張  
り合わせたものを使用。各  
パネルは見えないようにホ  
ゾでつなぎ合わされている。  
屋根、外壁とも船舶用の防  
水塗料が塗られた。

写真上／東西の開口部はフ  
ィックスガラスとガラスの  
扉になっている。扉は床の  
フックに鍵をかけ固定する。



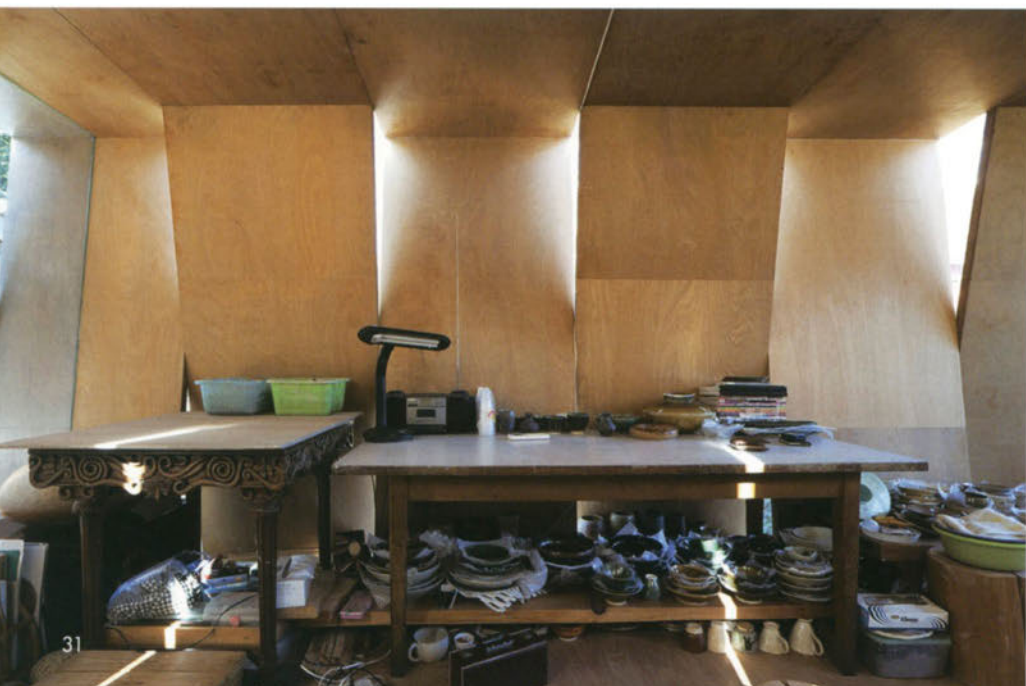


Special Feature/A Form of Expression, The Cabin Chapter 6



#### Case Study 4

写真上／庭から見た全景。傾きの異なる2種類の口の字フレームが交互に連結する。屋根は右手に向けて勾配が付けられた。中央は施主である原田真宏さんの父上。右手は増築された陶器の焼き場。



静岡県焼津市の静かな住宅街。とある家の庭に、東西に細長く白い離れがある。よく見ると長辺方向の側面の壁は、パネルが交互に傾きながらつながっている。妻側にまわると、両側の面には大きなガラスと木枠のガラス戸がはめられており、この建物は変形した口の字型のチューブが連続してできていることがわかる。

こは陶芸の趣味をもつ建て主夫婦が、時間を気にすることなく製作に励むことのできるアトリエ兼ギャラリーであるという。裏手にまわり、縁側のようなスペースから中に入る。床・壁・天井の合板が仕上げとしてそのまま現れ、囲われた空間。大開口を通して、東側には庭の梅や柿の木が、西側には隣接する公園の緑が見える。室内の仕上げや造作がシンプルなぶん、外の自然が豊かで身近に感じられてくる。妻側の大開口、またパネルの交差できている三角形の窓から入る光で、室内は十分に明るい。

「新車を買う代わりに、陶芸小屋を建てられないだろうか」と持ちかけられた原田真宏さんと麻魚さん。その予算は150万円。建築としてはわずかな金額であっても、自動車では確かな動力や設備機器などを完備した立派な「個室」が手に入る金額である。「ホームセンターでも安く売っている構造用合板を使い、合理的でリーズナブルなあり方を求めることにした」という原田さん。予算上、大部分をセルフビルドとすることは必須条件となるが、普段の仕事があるのでもそれほど多くの時間をかけることができず。原田さんたちは厚紙で模型をいくつもつくりながら、安定した構造と合理的な形状を生み出す工法を一气にまとめ上げた。その鍵となるのが、オリジナルの複合パネ

ルである。

主な構成材となるこのパネルは、900×1800×12mm厚の構造用合板を4〜5枚積層して張り合わせたもの。屋根パネルは温熱環境の向上と軽量化のために、中に断熱材を入れて製作している。パネル1枚の重さは30〜50kgほどで、大人ふたりで運搬し取りまわすことができる。これらのパネルの製作は建具業者に依頼した。

パネル同士の取り付けは、金物などを表に見せない納まりをしている。壁パネルの長辺の中央の小口には20mm径のダボ穴加工を施し、隣のパネルとは溝を切ったステンレスダボで連結していく。短辺の小口には横長のホゾ加工を施し、屋根と床をつなぐ。床パネル同士と屋根パネル同士もホゾでつなぎ合わせて固定する。壁―床と壁―屋根の接点はピン接合であるが、床面と屋根面は剛性が高いので、全体ではしっかりと固定される。

建物の「XXXX」という名称は、壁パネルがX字にクロスする様子を指している。工事中、壁パネルをX字状に連結していけば、屋根材を架ける前でも一時的に自立する。足場を組む余裕のないセルフビルドの現場を見据えての形であった。このX字の角度は、模型に力を加えて検証して確かめ



西側からの全景。左手奥に母屋と、古くからの植栽が茂る庭が広がる。手前には自然公園が眺望できる敷地の角地に建てられた。この眺望を取り込むために東西に向けて大開口が設けられた。

ていったという。「結果的に、強い角度のところが最も美しいと感じるフォルムでした」という原田さん。パネルは柱・梁・壁面・床面・屋根面のすべてを兼ね、自重が軽くて堅い「木製モノコック構造」ともいえる構造物であった。今回は全長7・2mにされたが、さらにつなげて長くすることもできる。このパネルには、コストダウンのために

サッシの役割も果たせられている。妻側の大きなガラスは、積層させた構造用合板のうち2枚分に溝を切り、差し込む。屋根パネルは水勾配を付けており床とは平行でないため、端からスライドさせてはめることができた。壁がクロスした部分にできる三角形のスリットは、外側から6mm厚のフロートガラスでふさぎ、2カ所のクリップと

### 「XXXX house」

シーリングで留め付けている。実際の施工は基礎を専門業者に依頼し、土台からパネルの立ち上げはセルフビルドで行った。近所の人たちを中心に集まり、総勢15名。ゴールディングウィークの3連休で上棟した。その後、ガラスや塗装の工事は断続的になったが、集中して行えば延べ約1週間で完成するという。予算は総額150万円できちんと納まった。じつはこの建て主夫婦は、原田真宏さんのご両親である。「父は船舶の設計をしていたので、合理性があれば形状にとやかくいわれることがなかった」と原田さんは振り返る。屋根の外側を船舶用の防水塗料とする仕上げは、父親からの提案であった。後日、塩ビ小波を根太材にのせて打ち付けることにしたが、それも自分たちの手による。「セルフビルドすると、どのようにできているかがわかっているので、改造することを恐れないようですね」と原田さん。何もかも合理的にする必要があったこの小屋が生み出した、大きな効果のひとつである。きびしいローコストの条件のなかで、合理性を突き詰めた原田さん。パネルにはいくつもの役割と機能をもたせ、システムチックな工法を考案した。しかし、それらの工夫はいわれなければ気づかないほど、表に見えず目立たない。セルフビルドにありがちな雑な感じも受けず、シンプルでおおらかな空間ができていく。ケースごとの必要に応じた徹底的な合理化は、いわゆるモダンイズムを超えて多様な美しさを生み出すことを確信させる小屋である。



# 「XXXX house」

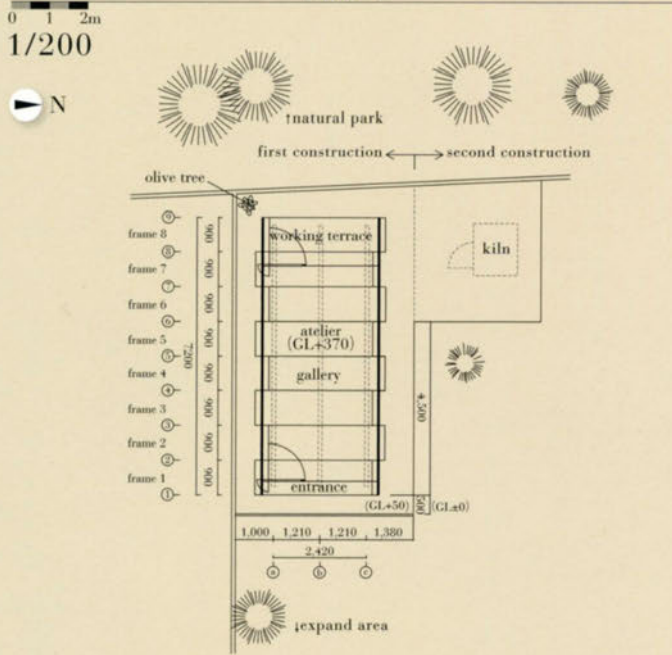
## 建築概要

所在地	静岡県焼津市
主要用途	陶芸製作のアトリエ
設計	原田真宏+原田麻魚/ Mt. Fuji Architects Studio
施工	セルフビルド
敷地面積	502.86㎡
建築面積	30.13㎡

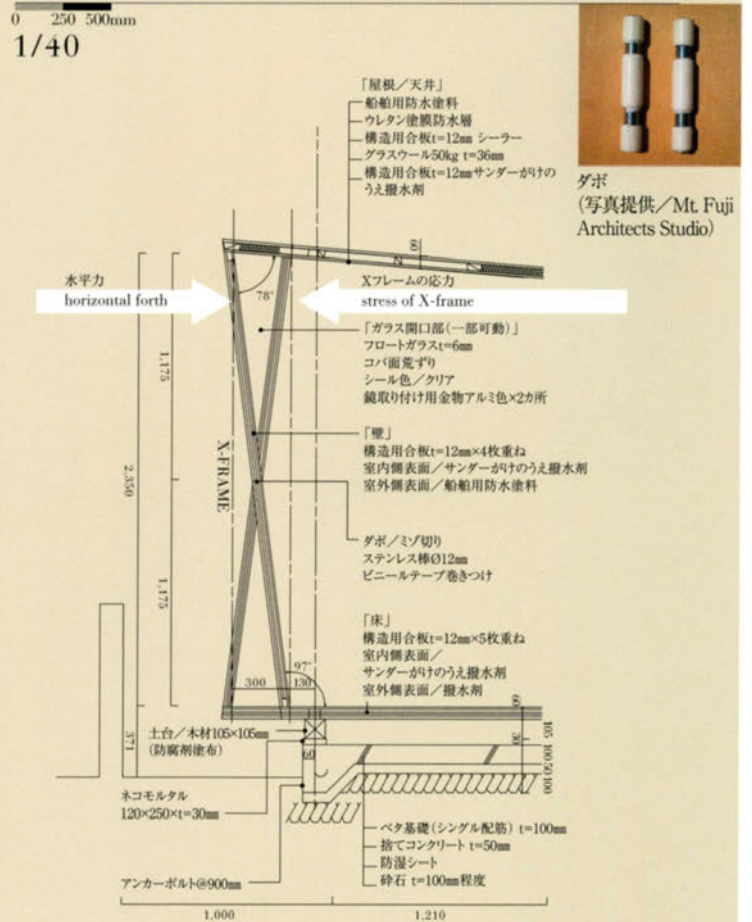
延床面積	16.70㎡(アトリエ)+窯場7.83㎡
階数	地上1階
構造	木造パネル構造
設計期間	2003年1月~4月
施工期間	2003年3月~9月
工事費	1,500,000円

おもな外部仕上げ	
屋根	船舶用防水塗料
外壁	船舶用防水塗料
	テラス部: キシラデコール白木やすらぎ
	開口部: ガラス框戸
おもな内部仕上げ	床 壁 天井: 撥水塗料

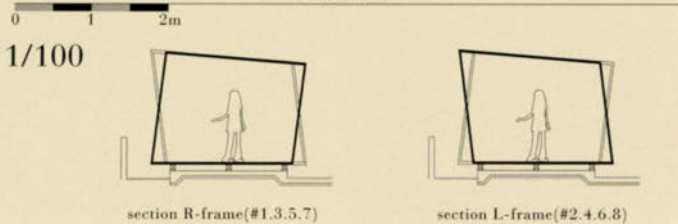
## 平面図



## トラス開口部断面詳細図



## 断面図



Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Chapter 6



Case Study 4



## 原田真宏

Harada Masahiro

1973年静岡県生まれ。97年芝浦工業大学大学院修士課程修了。同年隈研吾建築都市設計事務所、2001年文化庁芸術家海外派遣研修員制度によりホセ・アントニオ&エリアストレスアーキテツツ、03年磯崎新アトリエを経て、04年Mt.Fuji Architects Studio 設立。08年芝浦工業大学工学部建築学科准教授。

## 原田麻魚

Harada Mao

1976年神奈川県生まれ。99年芝浦工業大学工学部建築学科卒業。2000年建築都市ワークショップなどを経て、04年原田真宏とMt.Fuji Architects Studio設立。

おもな受賞=「XXXX house」(03)で03年SDレビュー鹿島賞、04年American Wood Award 2004 優秀作品賞、07年The Bardara Cappochin Prize for Architecture Best International Works、08年AR Awards for Emerging Architecture 2008「雨晴れの住処」(08): honourable mentions、09年Architectural Record Design Vanguard : best 10 architects in the world、10年Record House 2010「Tree house」: best houses in the world.



# 方丈の住居

屋根が開いて外部と室内がつながる親しみやすい姿。「paco」と名づけられた3m四方のキューブには生活に必要な設備が一式整えられ、地上のどこにでも設置できるようにと考えられた。愉楽に満ちた四畳半の現代プレファブ住宅は、問題提起の詰まった箱でもある。



写真右/床の一部を開けるとトイレが現れ、カーテンを吊るとシャワールームに。  
左/アクリルハニカムのトップライトで明るい室内。



写真右／庭に舞い降りたかのような白いキューブ状の「paco」。「新しいプレファブ」を目指して開発された箱は、どのような場所にも設置可能。左／最初は企画展示のためにギャラリーに設置された。おおよそ3m四方のボリュームは生活に最低限必要なスペースとして設定。



Special Feature

A Form of Expression, The Cabin Chapter 7



Case Study

Part

5

特集 小屋は過激だ／第7章 ケーススタディ5

設計／長坂 常

# 「paco」

取材 文=加藤 純／写真=太田拓実(ポートレートをのぞく)



写真右／床下の一部は寝室や倉庫として利用できる。左／屋根は油圧シリンダーで開閉ができ、この屋根にハンモックがかけられる。



横浜の住宅街の角。個人邸の広い芝生庭のなかに、真っ白いキューブが現れる。

ふわりと地面に置かれたような約3m四方の姿からは、さながら空の彼方から舞い降りてきたような印象を受ける。地上約90cmの高さにあけられたスチールドアから中に入る。内部は4畳半ほどのスペースで、天井高は2mほど。壁には窓がなく、アクリルハニカムがはめられた約600mm角のトップライトから光が射し込み、白い壁と天井にやわらかく反射する。

設計者の長坂常さんは外部とのかかわりにこだわり、必要なときに外とのつながりを生み出す装置を仕込んだ。屋根部分が開くという仕組みである。壁にはトラック荷台のガルウイング用の油圧ダンパーが取り付けられている。スイッチを入れると、だんだんと屋根が口のように開いていく。屋根のパーツにかけられた特注ハンモックに身を委ねていると、だんだんと外の様子が見えてくる。これまで閉じて見えなかった空が室内へ一気に入り込み、外からの風が心地よく感じられる。

「箱」をもじって「paco」と名づけられたキューブは、もともと長坂さんの事務所併設されているギャラリーに展示されていた。このプロジェクトは、リノベーション設計・施工を行うルーヴィスの福井信行さんから、長坂さんが相談を受けたことに始まる。1000万円を普通の不動産投資ではなく、新たな可能性にかけてみたいという投資家がいるという。長坂さんと福井さんは販売できる「新しいプレファブのモデル」に挑戦したいと盛り上がり、すぐに構想を練っていった。最初の話があつて

からわずか約4カ月で完成。相当なスピード感を伴っていたことがうかがえる。

## 建築とプロダクトのあいだ

pacoは、基本はひとりでテンポラリーに使うことが想定されている。室内にはアクリル製の小さなキッチン、床の一部を持ち上げて使うテーブル、床下に納められた寝室と収納、そしてトイレとシャワーが納められている。極小でありながら、生活するのに必要な設備が整っているのである。シャワーはトイレの上にクッション板を敷いて浴びる。シャワーカーテンは、透過性のあるオーガンジを超撥水加工したもので、シャワー時にも4畳半いっぱいの広さを感じられる。

3m角のポリウムは、最初に設置したギャラリーのスペースの都合もあるが、法規から出てきたものでもある。10㎡以内の増築は、地域や条件によっては確認申請を必要としない。pacoはどこにでも移動して設置できるため、現在のように庭に置いて「離れ」にすることや、自然が豊かな山や海辺に持ち込んでセカンドハウスにすることが似合う。複数を配置してコテージ型のリゾートホテルとする案もあるという。箱は下部と中部、屋根の3つのパーツで構成されている。2×4のパネルで8割方を工場で作成し、現場に搬入。施工は大工仕事で、外周のFRP防水工事を含めて10日ほど。価格は「箱だけ」の状態でも400万円から、給排水設備や用具が整ったフルスペックの仕様で600万円。いずれも色

や窓を開ける選択は、自由にカスタマイズできる。「すべてをカスタマイズできる建築」と、車のようなプロダクトとのあいだで、誰もが「なんだかほしくなるもの」をつくりたかった」と長坂さんは言う。確かに、気のきいた小物や設備に触れて、箱が置かれる様子を絵で見ると、夢がふくらむ商品である。

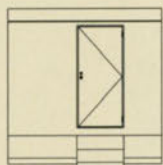
## 不自由さがもつ自由の可能性

さてpacoを設置することを想定していくと、長坂さんはインフラのことを考えるをえなくなつた。どれほど小さな建造物であっても、大きな建物と同じように電気やガスなどのインフラ、給排水や合併浄化槽が必要とされ、それらの整備には多大な手間やコストがかかってしまう。一方で、ソーラーパネルや雨水利用など自立型の設備を整えたインフラフリーハウスにしようとしても、現時点の試算では4000万円ほどかかってしまうという。しかし、長坂さんは考える。どのような規模の建造物にも同じルールが適用される現在の状況は不自然で不自由なのではないかと。長坂さんは「こうした自立型の領域に、日本の高い技術力が投入されるべきでしょう。この小さな1戸が自立できれば、より大きな街や都市でも自立しサステイナブルになることにつながっていくはず」と語る。

pacoはかわいらしい姿をしてはいるが、そのなかには既存の枠組みに一石を投じ、打開する可能性がいっぱいに詰まっている。

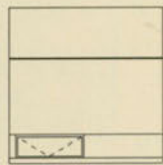
## 「paco」

立面図



Elevation

立面図



Elevation

### 建築概要

所在地	神奈川県横浜市
主要用途	セカンドハウス
企画 制作 販売	ルーヴィス
設計	長坂 常/スキーマ建築計画
製作協力	E&Y 森 美穂子 なかむらしゅうへい 岡安 泉
構造	木造(2×4)
規模	27(3×3×3)m <sup>3</sup>
設計期間	2008年9月~2009年1月
製作日数	約10日

### 外部仕上げ

外壁	ケイカル+FRP防水
内部仕上げ	
内壁	PB+EP
床	目下地のうえエポキシ厚塗り
シャワールーム	FRP防水
価格	400万円~600万円 (税別/基礎 配管工事は別途)



写真上／4畳半のスペースの中に、キッチンやテーブル、シャワー、トイレ、寝室、収納など生活するのに必要な設備が搭載されている。下右／入り口から室内を見る。照明は天井に埋め込まれた2カ所のLEDのみ。下中／立つかハンモックに吊られるとき、外の様子が眺められる。下左／夕景。

Special Feature / A Form of Expression, The Cabin Chapter 7



Case Study 5



# 長坂常

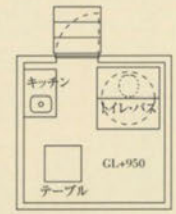
Nagasaka Jou

1971年大阪府生まれ。98年東京芸術大学美術学部建築学科卒業。スタジオスキーマ（現スキーマ建築計画）開設。2007年ギャラリーなどを共有するコラボレーションオフィスHAPPAを設立。現在、家具から内装、建築に至るまで幅広くデザインする。おもな作品＝「Sayama Flat」(08)、「奥沢の家」(09)、「63.02°」(09)、「Flat Table #001」(09)。著書＝「B面がA面にかわるとき」(DAIWA PRESS)。



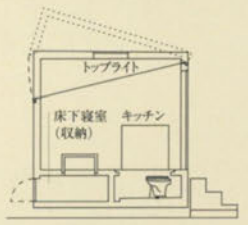
1/150

平面図



Plan

断面図



Section

0 1 2m



5 蒲原 (かもはら)



4 鉦打 (かねうち)



3 阿瀬比 (あせび)



2 大月 (弘見)



1 香峰 (こうほう)

Special Feature  
A Form of  
Expression,  
The Cabin  
Chapter 8



## Interview

with Uta Ichiyo

特集／小屋は過激だ 第8章 インタビュー

取材 文〓中原洋／写真〓秋山亮二

# お遍路さんへお接待

遍路小屋と聞いて思い出すのは、東南アジア一帯で見ることのできる小屋。マレイ語、インドネシア語圏では「バライ」と呼ばれている。村はずれに建てられていて、質素きわまらないまさに小屋そのもの。壁はなく、4本の木の柱が立てられ、屋根が架けられ、床が張られているだけ。格別のことはないけれど、人が寄る手がかりになっている。何が目的でもなく若者が集まった、村人の夕涼みの場であったり、旅人の一夜の宿であったり。

「四国八十八カ所ヘンロ小屋プロジェクト」の小屋もこのアジア的バライに似ていなくもない。お遍路さんの道々に建てられている。違う点があるとすれば、これが建築家、歌一洋さん個人によって企画デザインされたプロジェクトによるということだ。建てるのはボランティアの人たち。時にはプロの職人さんを雇うこともあるけれど、プロジェクトへの共感者によって建てられ



ヘンロ小屋はお遍路さんがまわる道に立っているから、ひなびた所から繁華街まで状況はさまざま。



15 清水川



14 大浦



13 佐賀



12 眉山 (びざん)



11 勝浦



10 宿毛(すくも)

9 大月

8 香我美

7 芳井

6 穴喰(ししくい)

## 四国八十八カ所へんろ小屋プロジェクト主宰・歌 一洋さんに聞く

ている。さまざまな人がさまざまな形で参加できるように  
っているのだ。

小屋は地域を意識したデザインです。すでに39カ所。たとえば  
JR徳島駅近くの小屋の屋根は阿波踊りの女性がかぶる「鳥  
追い笠」を下敷きにして建てられている。

歌さんがこのプロジェクトを思いつき走りはじめるきつ  
けは遠く子ども時代に帰る。徳島に生まれ、幼い頃、白装束  
のお遍路さんが玄関先に立ち、拜  
んでくれるたび、お米などそのと  
き家にあつたものを首につるす袋  
に入れてあげる。「お接待」だ。そ  
の思い出が年を重ねるごとに強く  
なり、このプロジェクトを発想す  
ることになった。ひとりで始めた  
ことだけれど今は数百人の賛同者  
がいる。各地に小屋を掃除したり  
維持したりする共同体もできてい  
る。へんろ小屋を建てること自体  
がお接待の精神の現れであり、維  
持することもお接待だ。

何が、このプロジェクトにこれ  
だけ人を引きつけるのか。

歌さんが言う「祈り」を建築のテーマにしているという心  
もあるかもしれない。その個人的な思いが四国八十八カ所巡  
りのお遍路さんの歴史と御大師さまと呼ばれる僧・空海によ  
る日本人の心を刺激し、小屋としての形をとっているという  
ことだろうか。どこかに人は「お接待」に参加したいという  
心があり、四国はまさにその伝統や想いを誘う場なのだろう。



写真右はJR徳島駅近く  
に立つへんろ小屋の第  
一の旗振りの建築家、  
歌一洋さん。ここだけ  
は相似形のへんろ小屋  
が2基立っている。ペ  
ージの上下に並ぶのは  
歌さんの設計です。すでに  
完成したへんろ小屋の  
数々。

お接待の心を  
形にした建築が  
人を誘う

へんろ小屋1~40写真提供/歌一洋

20 足摺

19 津島 かも田

18 丸亀城乾(じょうけん)

17 須崎

16 宇和





25 石手寺(いしてじ)前



24 高松・一宮



23 仙遊寺接待所



22 大方



21 宇和島光満(みつま)



### 歌一洋

Uta Ichijo

1948年徳島県生まれ。77年歌一洋建築研究所設立。2004年より近畿大学教授。01年から四国八十八カ所へんろ小屋プロジェクトを推進。お遍路のための休憩仮眠のできる小屋を89カ所に十数年かけてつくるプロジェクトで、ボランティアによって実施されている。おもな受賞：石山寺に建つ住宅設計競技優秀賞(78)、第27回大阪府建築コンクール渡辺節賞(81)、イタミ小劇場指名設計競技最優秀賞(85)、高島町生涯学習施設(音楽ホール、研修棟、図書館)指名設計競技最優秀賞(91)、大阪倫理会館設計競技最優秀賞(へんろ小屋 蒲原)で日本木青連木材活用コンクール入賞など。

このなつかしい「お接待」という言葉の響きに誘われてしまふ。遠くにも参加可能なプロジェクトの形。それが四国だけの、地域の人だけのものではない、大きなプロジェクトとして動きはじめています。

歌さんだって驚いている。「最初はひとりでごっこつやろうと思っていたことが、ニュースに流された途端に賛同者が集まった」と。ひとりの建築家がいって、そのプロジェクトの噂が伝わって、小屋が形になっていく。人の心を誘う力を小屋が育てている。「小屋」としての原型を想起させるデザイン、シンブルがゆえの強いメッセージ性があるからといっていいだろうか。かつて四国には「茶堂」というお堂が各地にあったという。その違いは基本的に四方のうち、一面が壁になっていることと教えられた。若衆宿的役割も果たし、遍路小屋的な役割もときに果たしていたと聞いた。

プロジェクト成功のデザインのポイントのひとつに、もしかして四本柱で見通しがきくという開放性があるのかもしれない。

人の心が寄りつく  
手がかりが  
このへんろ小屋にある



35 土佐清水



34 久万(くま)高原



33 宿毛(すくも)



32 天神



31 そえみみず 酔芙蓉(すいふよう)





30 銭形



29 多度津 おかのやま



28 松本大師堂



27 鎌大師



26 わん屋

世界にも珍しい  
お接待の形  
ヘンロ小屋

四国ヘンロ小屋マップ

Henro Koya Map



1～39 完成したヘンロ小屋  
● 建設予定地

ヘンロ小屋は  
お遍路道の  
交点にある

ヘンロ小屋プロジェクトはまだまだ続く。



建築概要

11号ヘンロ小屋勝浦	12号ヘンロ小屋眉山	3号ヘンロ小屋阿瀬比
所在地 徳島県勝浦郡勝浦町生名	所在地 徳島県徳島市新町橋阿波おどり会館前広場	所在地 徳島県南市阿瀬比西内
施主 行政+地元大工さんと地元ボランティア	施主 徳島ロータリークラブ	施主 地元ボランティア
施工 地元大工さんと地元ボランティア	施工 島出建築事務所	施工 近所の大工さんを中心に地元の人10人
建築面積 9.33㎡	建築面積 8.70㎡	建築面積 6.34㎡
構造 木造	構造 木造	構造 木造
竣工 2005年6月	竣工 2005年5月	竣工 2002年4月

40 番外小屋

39 NASA

38 内子

37 しんきん庵・法皇

36 神山



あのロサンゼルス・モンドリアンが改装をした。デザインはオリジナルのワイリップ・スタルクではなく、ベンジヤミン・オリツ。例の植木鉢こそ残っていたが、確かにスタルクのあくの強さは消えていて、モーガンズ・ホテル・チェーンらしいソフィステイクートされた品のよさがそここに充満していた。

ロスの若きセレブたちが夜な夜なレストランやプールサイドに遅くまで集い、大歓声をあげていてじつににぎやか。その舞台にはうってつけのデザインだ。品がよいとはいえ、ロビーでは光とボイル・カーテン（\*1）とミラーやガラスを多用し、クラシック家具をオブジェ化して日常性を打ち砕いて見せている。自由奔放であるから 一般のホテルからみるとじつに刺激的。

それはルームにもおよんでいる。「何だ？これは」を連発することになるからだ。

ベッドのヘッドボードと同じデザインの巨大なソファ。床から天井まで 本足で立って回転する大きなオブジェのようなテレビ、裏側が赤いミラーになっている。黒い模様のテーブルトップには「手」の形をしたオブジェ。メープル材の床には大きなプラントボックスが鎮座している。入室してすぐのライティグ・デスクの上にはシャンデリアが下がり、左右にはボイル・カーテンを多用して壁や窓は半透明。うねっているところもある。バスルームはシャワーだけ。便器の上はダブルフック……とまあ、やりたい放題のデザイン。すべてが遊び。きわどいが、かろうじて「扉の上」か。この世界では装飾もアイコンのひとつにすぎないのである。



壁に9個のダブルフックがついたバスルーム。

このような尖ったホテルは、陳腐化が敵になる。つねに最前線前衛でなければならぬからだ。そうでなくなるとき、たぶん、また改装を余儀なくされるのだろう。これはこれできびしい世界だ。

方、元祖スタルクはというと、同じロスに2008年の秋、オープンしたSLSホテルアットビバリーヒルズ（\*2）で気を吐いている。スターウッド・グループ。改装し、すっかり変わったホテルは、まるで家具店か骨董品店の中を歩いているような錯覚に陥る。ホセ・アンドレのプロデュースした楽しいダイニングルーム「バザール」。手術室のようなバニクドアハンドルが並ぶファンクションルーム。エントランスにはロビーからあふれ出したようなソファが外にあったり、プールサイドに額縁付きの姿見が並んでいたりと頭がおかしくなりそう

だ。理に落ちたり、経済的・効率重視とは別のものに見えるからしかし297ある客室は意外におとなしい。

中国武術に酒に酔ったような拳法、酔拳（すいけん）というものがある（本当にあるかどうかはわからない）が、ふたつのホテルデザインはそれを思わせる。危なっかしく、酔ったように見えるなかに絶妙な力量が隠されているような気がするのだ。

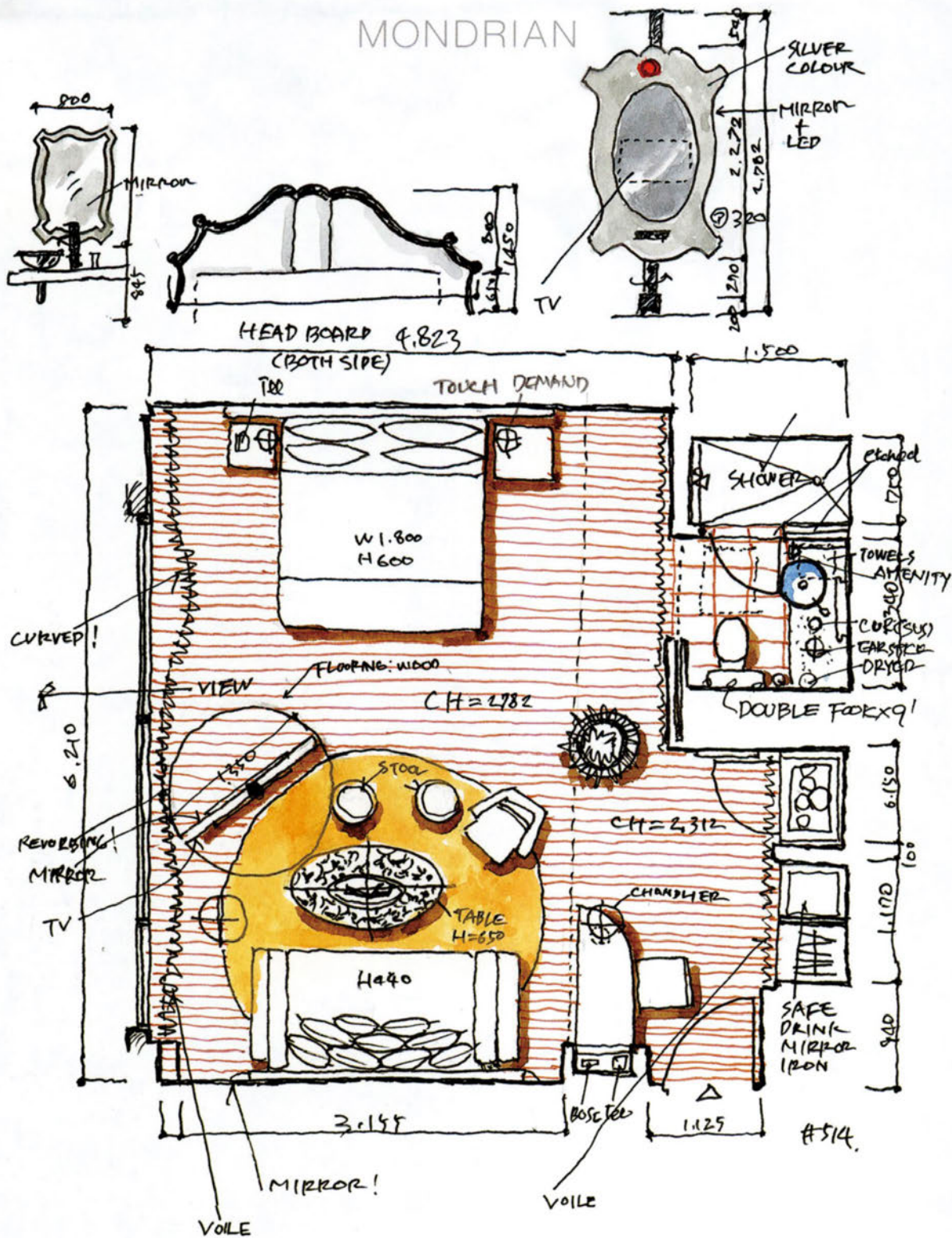
ともあれロスに行ったらこのふたつのホテルの改装は見逃せない。決して 般解ではないが、その筋の最前線の姿を確認するためにも……。

## 「酔拳」のようなデザイナーズホテル

うら かずや／建築家 インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99年日建スペースデザイン代表取締役。おもな作品＝「ロテル ド ロテル」(88)、「ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル」(91)、「飯綱山荘」(91)、「ホテルモリノ新百合丘」(97)、「メディアージュ」(2000)。著書に「旅はゲストルーム」(東京書籍 光文社)がある。

\*1 / voile: 薄織物  
\*2 / SLS HOTEL at Beverly Hills  
465 South LA Cienega Blvd., Los Angeles, CA90048  
<http://www.starwoodhotels.com/>

# MONDRIAN



MONDRIAN LOS ANGELES

8440 SUNSET BOULEVARD WEST HOLLYWOOD CA 90069 PHONE 323 650 8999 FAX 323 650 5215

MORGANSHOTELGROUP.COM

自由奔放なデザイン。バスルームはシャワーだけ。

Add / 8440 Sunset Boulevard West Hollywood, CA90069 U.S.A.

Tel / 323 650 8999

Fax / 323 650 5215

URL / [www.mondrianhotel.com/](http://www.mondrianhotel.com/)

Room Charges / Deluxe Suite 401S Balcony Suite 446S

1S = 90.53円 (2010年3月24日現在)

MONDRIAN



1 / 右手のコンクリート梁と上部の木の梁（根太というべきか）に注目してほしい。コンクリートと木がまったく同列に扱われているだろう。こんな建築は見たことがない。

## 「101番目の家」設計 / 竹原義二

Takehara Yoshiji × Fujimori Terunobu

# 物<sup>2</sup> + 技術



## 現代 住宅 併走

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu, Photographs by Akiyama Ryoji

写真／秋山亮二

連載 第十四回

# ど

これからどう入ったらいいものか、竹原義一の仕事の前にとまどいを覚えた者は私だけではない。すでに、この連載、岸和郎と難波和彦のふたりを「苦手シリーズ」として取りあげたが、さしずめ竹原は「困惑シリーズ」の第1号となる。

コンワク竹原に分け入ってみようと思ったのは、2年前、石井修の目神山の住宅を取材したときで「TOTTO通信」2009年新春号、学校を卒えたばかりの竹原青年が新入り所員として加わったのが石井邸建設であり、石井所長に

従って田舎の持ち山に入り、木を伐り、製材し、柱として使ったというのである。山で木を伐ることからスタートした建築家・竹原義二。山で木を伐りたい。心で設計もしている私としては、放っておくわけにはいくまい。

で、竹原の自邸（101番目の家）を見た。

遠目でまず困惑。日本の建築家は、誰でも、木造建築は水平プロジェクトを基本とするのに、この縦長感覚はなんなのか。加えて、部分のポロポロ感もなんかおかしい。ふつう、こうした、気づいたときにはすでに身につい



6



4



3



2

2/入り口を入ってすぐの中庭（図面では「外3」）。3/きわめて珍しいポロポロ感を示すファサード。

4/中庭の階段。5/2階子ども部屋（内4）と1階の食堂（内2）をつなぐ梯子。6/中庭の2階部分を見る。手すりの太さに注目。コンクリートに負けないように木を使っているが、性格のまったく違う材料を視覚的に平等に扱う美学は20世紀建築の原則からはズレる。20世紀建築は、それぞれの材料にはそれぞれにふさわしい構造形式と美学がある、としたからだ。

てしまっているセンスについては口出しをしないのが建築家付き合の礼儀だが、困惑シリーズと銘打つからには困惑の理由を隠すわけにはいかない。

近づくともっととまどう。木の板の縦羽目張りが見えたのが、板なんかじゃなくて、ムクの柱の並びなのだ。それも超貴重な幻の南洋材（熱帯雨林材）タガヤサン。銘木の床柱をズラリと立て並べて壁としている。

その結果、空間が、日本の木造ならではの軽快さを失い、まるで石造のような重厚さを獲得する、というか陥るといふか、誰だつて



7

困惑せざるをえない。

使われているすべての木材は、柱も梁も床も框もこの調子で、太く、厚く、堅く、重く、そしてにぶく光っている。大量の南洋材のなかにわずかながら例外的に仲間入りを許されているのは国産の松材だが、銘木のヤニマツ（コエマツ）。

石材のごとき木の質感に追いつけをかけるのは、打放しコンクリートが梁や壁にも使われている点で、混構造となっている。

「混構造が好きで、建築全体での木の立米（体積）とコンクリートの立米は1対1です」



Takehara Yoshiji × Fujimori Terunobu

## 現代住宅 併走

8 / 2階の居間のような客間のような畳敷きの部屋(内5)。太くて硬くて四角な木材への設計者の偏愛がよくわかるだろう。

7 / 1階の食堂(内2)。壁が太い角柱の並びによってつくられている様子がよくわかる。角柱は各種南洋材からなるが、例外的に国産のヤニマツ(コエマツ)が混じっている。ヤニマツとは、アカマツの古木のうち、年輪の冬目の部分がとりわけ発達したものをいい、ヤニ分が多く、硬く、しかも古木ゆえヤニは出ない。もちろん銘木のひとつ。ふつうは床板に使われる。



ついでにもうひとつ、「床の面積と中庭の面積も1対1です」。

1対1にすると、やった気がするというか、気持ちが落ち着くのだという。

1対1の感覚。よくわからないが、竹原建築の根本に水の如くたたえられている造形感覚にちがいない。そういえば、柱による壁体も、平面として見れば柱と中間は1対1。

1対1感覚の立体はサイコロだが、竹原邸の外観のプロポーションも、縦長好きというより、大小いくつかのサイコロを積むと生まれるプロポーションなのかもしれない。

木とコンクリートの混構造は、下層を打放し、上層を木造のときのみに成功する、と私は長い建築探偵体験から思っている。同一層での混合は、吉村順三でも失敗する。それを竹原は好んでやるのだが、いくらなんでもやりすぎと思つたのは、西側の角の部分で、外から眺めると、そこだけ別の建物のように突起して見えた。

# 和

子夫人と上の娘の未来さんが出してくれたお昼を楽しみながら、影響を受けた建築家について聞く。

白井晟一、篠原 男、石井修。石井については、山から伐り出すような原材料への直接性を学ん



10



9

Takehara Yoshiji × Fujimori Terunobu

## 現代住宅 併走

だというのが、一番大きかったのは白井で、次が篠原だという。

白井、篠原という日本の戦後建築界の猛毒を飲んでしまったのだ。よく死ななかつたと思う。死なずに生き返るだけの造形的体力と体質に竹原は恵まれていたわけだが、ふつうこれだけの猛毒を飲んで生き返ると、化け物になるしかない。竹原は化け物か。今、こう書きながら、そのように思えるときもあるが、それ以上に、建築史家の目には深い興味湧いてくる。白井が無意識のうちに提示したポストモダンの問題である。

# 私

は、日本のポストモダンの始点は白井と考える。モダニズムとは、

建築を成り立たせる三要素たる物、技術、形の3つがバランスよく統合されていた状態をさし、その3つのバランスがくずれたり欠落が生じた状態をポストモダンとする。

白井の建築は、物と形のふたつが野合し、両者をつなぐ技術が欠いていた。正確にいうと、物の存在感覚と形のおもしろさは存分にありながら、ふたつを結んでひとつにする技術感覚がなかった。それが、白井の建築の前例のない印象深さの秘密であり、ポストモダンの開幕を告げるファンファーレとなつたのだ。篠原は、まず形、ついで技術とふたつはあったが、物の感覚に乏しかった。

こうした部は汪溢し、部は欠けたふたりから影響を受けてひとりの青年建築家がスタートすると、つまり、ポストモダンの二重奏からスタートするとうなるかが、竹原建築を見るとわかる。

メンデルの遺伝学にならって、白井の「物+形」と、篠原の「技術+形」を足すと、「物+技術+形」となるのだが、どうも違う。なんといつても竹原は物の感覚が技術や形より勝る。あえていうなら、形が欠けている。「物+技術」が番正解に近いだろう。

ひとつの完成した建築のスタイルが、新しいスタイルに生まれ変わる時、気に全体が変わるのではない。まず要素の部の欠落とそれ故の一部の過剰が出現し、こうした欠落・過剰現象があらゆるパターンで起こり、混乱し、そうした混沌の時期をくぐってから初めて、それまでなかった新しい質が各要素のなかに生まれ、さらにそれらの新しい質をもった要素が統合化されて、新しい建築が生まれる。

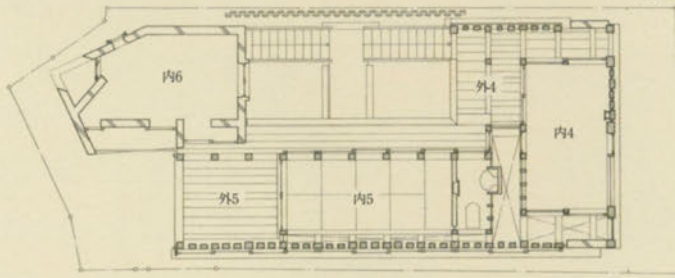
竹原の建築は、物と形が過剰で技術が欠いた白井晟一の後を継ぎ、物の過剰と形の欠落という独自のあり方によってポストモダン状態のひとつを体現している、と考えたと、見えなかつた入り口がなんとか見えてくるのではないか。



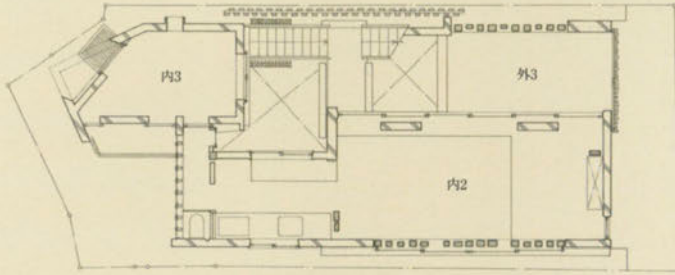
# 101番目の家

[ 平面図 ]

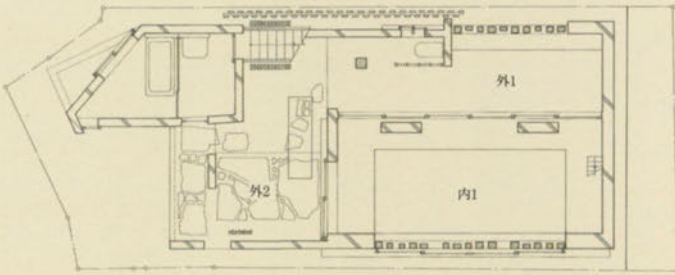
1/200



2階平面図



1階平面図

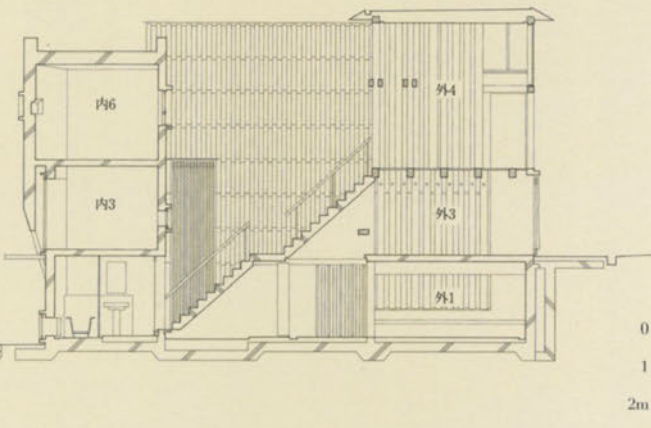


地階平面図

0  
1  
2m

[ 断面図 ]

1/200



0  
1  
2m

## 建築概要

所在地	大阪府豊中市
主要用途	専用住宅
設計	竹原義二／無有建築工房
構造設計	ガル構造事務所
施工	中谷工務店
敷地面積	108.80㎡
建築面積	65.22㎡
延床面積	156.21㎡
階数	地下1階、地上2階
構造	木造、鉄筋コンクリート造
設計期間	1999年7月～2000年8月
施工期間	2000年10月～2002年5月
図面提供	無有建築工房



11

9/地階(内1から外1を見る)。10/地階の穴蔵のスペースで、設計者のプライベート空間。白井晟一の白邸の書斎をしのはせる。11/地階の中庭というか、通り土間。的なスペース。12/裏手西側外観。



## 竹原義二

Takehara Yoshiji

たけはら よしじ/1948年、徳島県に生まれ、71年大阪工業大学短期大学部卒業後、大阪市立大学を経て石井修の事務所に入る。石井の許で、材料や施工への強いこだわりを学ぶ。78年独立し、大阪を本拠に旺盛な設計活動を開始し、住宅、幼稚園などの作品群を生み出す。いずれの作も、ひと目で竹原作とわかる印象深さをもつのだが、どうしてそのような作が生まれてくるのか、現代建築の流れのなかでどのような位置にあるのか、説明しづらい存在で、その存在感の強さにもかかわらずこれまでほとんど論じられていない。



## 藤森照信

Fujimori Terumichi

ふじもり てるのぶ/建築史家、工学院大学工学部建築学科教授。建築家。著書に「明治の東京計画」(岩波書店)、毎日出版文化賞、建築探偵の冒険東京篇(筑摩書房)、日本デザイン文化賞、サントリー学芸賞、「藤森照信の原 現代住宅再見(1)〜3」(TOTO)出版。建築作品に「神長官守矢史料館」(91)、「タンポポ」ハウス(95)、「赤瀬川原平邸」(ニラハウス)(97)、日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)、日本建築学会作品賞などがある。

# 南アルプス市健康福祉センター

## 五感で感じられる先進のユニバーサルデザイン

山梨県南アルプス市は2003年に旧中巨摩郡の6つの町村が合併して誕生した市。市内のあちこちにさくらんぼ、ぶどう、桃などの果樹園が広がる自然豊かな地域だ。

このほど同市内で建設中だった「南アルプス市健康福祉センター」が竣工した。施設はRC造2階建てで、老朽化した隣の旧白根町役場から移転する白根支所が入居するほか、1階には健康づくりホール、2階には児童館、調理実習室、会議室なども配置。つまり、保健・福祉・行政の機能をひとつにまとめた新しい複合型施設であり、今後は市民の健康づくりの拠点として活用されることになる。設計は日建設計と山梨建築設計監理事業協同組合が協働で行った。4月のオープンに先駆けて、先進的なユニバーサルデザインの実例として注目される施設の中身を取材した。

### テーマは アクセシビリティ

同市保健福祉部健康増進課の飯野一幸さんは、計画にあたり、第一に要望したのは

「どんな人にも使いやすい建物にしたい」ことだったと振り返る。これに対し、設計を担当した日建設計が掲げたテーマはアクセシビリティ。「建物にも、必要な情報にも、寄りつきやすくしたいと考えました」と同社設計部門設計室長の岩崎克也さんは語る。アクセシスのしやすさを象徴するのは、まず「わかりやすい骨格」を目指したというプラン。吹抜けのある大きなホールを中心に、4つの四角いボリュームをずらしながら組み合わせたH型の平面のおかげで、室内は明るく開放的。南北2方向に出入口があるだけでなく、4面すべてに開口部があり、見る方向によって異なる表情の山並みが見えるなど、切り取られた風景が目印となるため、自分が今どこにいるかがわかりやすい。また、南北で外壁タイルの色を変えたり、ホールの吹抜けに面した壁面に方角と階数を示した大きなサインを配してあるのも、自分の位置を確認しやすくするための配慮だ。

ただし、こうした視覚的な仕掛けはほんの序の口であることが、岩崎さんに館内を案内していただくうちにわかってくる。たとえば、1階、2階とも床から高さ900mm上がった壁沿いに、素材を変えた幅200mmのラインがまわしてあるが、これは手すり代わりのガイドの役目を果たす。帯状のラインをなぞっていけば、スイッチ、引き手、コンセント、点字情報などもすべてここに集約されている。

一方、健常者はなかなか気づかないことだが、廊下のコーナー部分の天井をほかより高くしたり、床の仕上げをあえて変えてあるのも、サインのひとつだと岩崎さん。つまり、床の高さや材質が変わったことで反響音が微妙に変化するため、聴覚が発達した人にとっては十分場所を把握する目安になるという。

入館者をあつと言わせるにちがいない、ガラスの箱が宙に浮いたように見えるシースルーエレベータも、どこからもよく見えるようにと考えられた結果であり、入り口と出口のドアを別にすることで車いすを回転することなく乗降できるようにするなど、こまやかな配慮は怠りない。さらに、降りるところにある手すりをよく見ると、ほかの場所が木なのに対し、エレベータ



コミュニティーホール。左下方にシースルーエレベータが見える（写真提供=岡本公二）。



北側外観全景。2階へはスロープでアクセスできる（写真提供=日建設計 近本直之）。

取材 文/大山直美 写真/山下恒徳

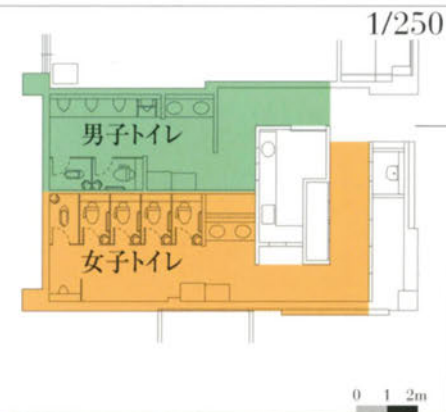


写真右／自然光の入る1階男子トイレ。上／1階のホールからトイレへのアプローチ。色と素材を変えた帯状の壁のラインがガイドの役目を果たし、点字情報などもすべてこのライン上に集約されている。



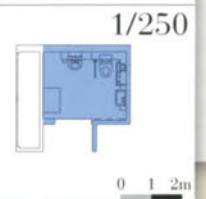
## 男子トイレ

男女トイレ



1階平面図 自然光を十分に取込んだ吹抜けのホールが建物の中心。そこにエレベータ、階段、廊下などの移動空間を配置している。

多機能トイレ



## 女子トイレ

写真上／女子トイレ内の幼児用小便器。中／全景。左／ブース。和風便器のブースもある。

## 多機能トイレ

TOTOのパブリックトイレ「RESTROOM ITEM 01 (ゼロワン)」が採用されている。



女子トイレ

男子トイレ

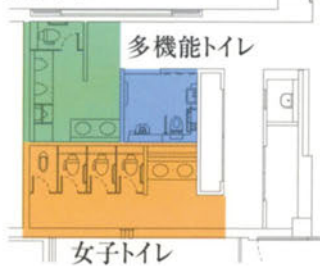


視認性を高めたアプローチ

北側トイレ

1/250

男子トイレ



女子トイレ

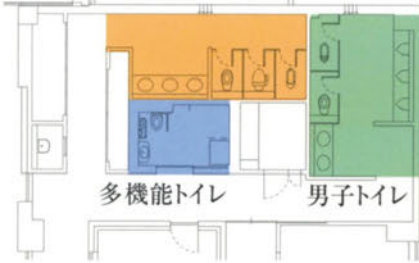
0 1 2m

写真右/2階北側トイレのアプローチ。右手男子トイレの手前の扉は多機能トイレの出入り口。中/トップライトのある男子トイレ。左/縦長のスリット(左手)から自然光が入る女子トイレ。

南側トイレ

1/250

女子トイレ



多機能トイレ 男子トイレ

0 1 2m



多機能トイレ

シャワースペースを設置して、さまざまな用途に対応。

南側トイレ



男子トイレ

児童室に近い南側トイレには幼児用便座付きのブースがある。

## より多くの人のための 快適トイレ

日建設計社内のUD研究会の代表も務めるという岩崎さんいわく、「健常者は情報の80%を目から得ているといわれますが、ここでは目や耳だけに頼らず、手触り、色や温度の変化、香り、季節感、そしてランドスケープなど、あらゆるものが五感で感じられる建物にしたいかった」。

こうした広い意味でのユニバーサルデザインは、むしろトイレづくりにも反映されている。飯野さんによれば、トイレに関しては施設の性格上、市の力の入れようもひとかたではなく、事前にさまざまな身体状況の方に意見を聞くなどして要望をまとめ、電動車いすでも入りやすい広さを確保したい、オストメイト対応にしたい、子どもを着替えさせる場所がほしいなど、細かい項目を挙げたそうだ。「すべての要望をひとつのトイレで百パーセント満足させるのは難しいので、求められる機能を分散させ、全体として満たすようにしました」と岩崎さん。

幸い、トイレは1階に男女トイレと多機能トイレが各1カ所、2階には男女トイレと多機能トイレが各2カ所にあるため、フロアによって多機能トイレの便器とドアの関係や手すりの位置(左右勝手)を変えて、さまざまな身体状況の人にも使いやすくなるなど、バリエーションを設けたとのこと。また、多機能トイレも含め、どのトイレにもトップライト、ハイサイドライト、ス

# 南アルプス市 健康福祉 センター



## 建築概要

所在地	山梨県南アルプス市飯野 2806-1他
主要用途	健康センター、幼児童施設、 市町村の庁舎
事業主	南アルプス市
設計監理	日建設計+山梨建築設計 監理事業協同組合
施工	早野組、宝建設、米山住研
敷地面積	10,836.96㎡
建築面積	2,162.27㎡
延床面積	3,305.96㎡
階数	地上2階
構造	鉄筋コンクリート造
設計期間	2006年7月~12月
施工期間	2008年2月~2010年3月
オープン	2010年4月

## おもなTOTO使用機器

### 女子トイレ

大便器：C743PVRS  
ウォシュレット TCF581WR  
洗面器：L546U+TEN51AX

### 男子トイレ

大便器：C743PVRS  
ウォシュレット：TCF581MR  
小便器：UFS800CE  
洗面器：L546U+TEN51AX

### 多機能トイレ

XPDA8L/RSA81AWWW特



「自然光の入る多機能トイレ」

2階の多機能トイレも「RESTROOM ITEM 01 (ゼロワン)」が採用され、機能とデザインを高いレベルで両立している。



2階平面図

男子トイレ、女子トイレ、多機能トイレとも北・南に分けて2カ所ずつ設けられている。

1/1000

0 5 10m



リット窓など、できるだけ開口部を設け、自然光を採り入れるよう、工夫した点も見逃せない。

多機能トイレに関しては、着工時に発売されたばかりだったTOTOのバブリックトイレ「RESTROOM ITEM 01(ゼロワン)」をいち早く設置しているが、これは開発時から注目していたという岩崎さんの推薦で採用にこぎつけたもの。高さ750mmに統一したライニングを手すり代わりに、水平移動や動作の移行がスムーズにできる点が評価された。

当初は福祉担当者の要望もあり、市では別の車いす対応トイレの採用を検討していたそうだが、「現物を見て説明していただいて、なるほどと思いました。スイッチの大きさやトイレトベーパーの位置など、すべてがよく考えられているし、便器のすぐ横に手洗い器があるのも衛生的ですね。デザインはすばらしいすぎるほどで、ごたごたしがちな多機能トイレがすっきり見えます」と飯野さん。今後は多機能トイレをはじめ、美しく快適なトイレを同センター自慢のスペースとしてPRしていきたいと締めくくってくれた。

ino Kazuyuki



南アルプス市  
保健福祉部 健康増進課  
健康企画担当 主査

飯野一幸

Iwasaki Kazuya



日建設計  
設計部門 設計室長 兼  
フロンティア日建設計 取締役

岩崎克也

## 疾風の「じ」ときスピード感

代表取締役

### 米山 茂さん

昨年の不動産不況の影響は、順調に着工棟数を伸ばしていたタツミプランニングも例外ではなかった。「社員総動員で、絶対にあきらめず、とにかくできることをやりつづけて、乗り切ることができた」と米山茂さん。何事にも屈することなく、全社一丸で目標に突き進むその会社の強さは、いったいどこからくるのだろうか。

### 現場で築き上げた信用とネットワーク

米山さんがタツミプランニングの前身、タツミ企画を創業したのは1991年。当初はユニットバスやシステムキッチンの取り付け作業を請け負う会社で、米山さん自ら現場に向き工事にあたっていたそう。当時21歳。「地元の友人にも声をかけて」仕事をこなしただというから、みんなから慕われるまともな存在だったのだろう。やがてサイディングを中心とした外装工事も手がけるようになり、少しずつ会社の規模も拡大していく。およそ10年で有価会社、株式会社と組織変更していくのだが、それは、「おそらく神奈川県下でナンバーワンではないか」という規模の外装工事を受注するまで

の成長過程でもあった。

「6〜7年前に、1棟まるごとやってみないか、という話をいただいたのがきっかけ」で戸建て住宅を「括で扱うようになる。最初の1年は、「まわりから教わりながら」建ててみた。そこで手ごたえを得て本格参入するわけだが、驚くのは「来年は100棟やろう」という社長の思いと目標設定の高さ。そして「それが、できたんですよ」という自信と実績がすごい。営業活動から現場の調整、人の確保と、いくら目標とはいえ、現実には容易には進んでいかない事柄ばかりである。それを、「現場で培った人脈と信頼関係が、これを可能にしたんです」。米山さんはこともなげに語るが、そこに至るまでにタツミプランニングがどれだけ厚い信用を築いたかがうかがえる。

### 高気密高断熱を柱にした

### 注文住宅へシフト

「注文住宅の比率を高めたい。そのために新たな体制をつくっていいところですよ」

100棟の住宅をはじめ、これまでタツミプランニングが建ててきたのは、不動産業者から依頼される、いわゆる建て売り住宅だ。

だがライフスタイルが多様化し、人の暮らし方がさまざまになる昨今、「エンドユーザーから直接仕事を依頼される注文住宅にシフト」しようという方向性を定め直す。そのために昨年、自社の家づくりをわかりやすく説明するパンフレットをつくった。そこで謳われているのは、ウレタン吹付け断熱材を採用した高気密高断熱の家。現場発泡の「フォームライトSL」(\*)を自社施工するが、じつはこのウレタン吹付け工事も、住宅建設に本腰を入れる少し前から事業のひとつになっていて、現在でも関東で一番のシェアを誇る。得意の断熱技術を駆使した、性能のすぐれた家。「僕が好きだから」(米山さん)採用されているシンプルモダンのデザイン。そしてローコスト。タツミプランニング・オリジナルの家は、この3つを武器に売り出し中である。

会社化した1期と比べ、今年度の14期(見込み)の売り上げはおよそ50倍。その勢いは、100年に一度といわれる不況のなかでも変わらない。「こういう時期だからこそ、優秀な人が来てくれる」と積極的に人材を募集し、直近の目標として、従来からの建て売り住宅150棟のほかに、注文住宅1

横浜市内に竣工したばかりの住宅を訪ねた(以下写真すべて)。写真右/1階リビングダイニングキッチン。シンプルモダンがデザインテーマ。左/和室から見たところ。左ページ上/リビングの壁面を背景に、米山茂さん。下右/2階の寝室とロフト。下中/2階。中央は屋上への階段。下左/正面外観。



取材文/市川幹朗 写真/山下恒徳



Housing Company

今、住宅会社の動きから目が離せない。  
活動領域はさまざまだが、  
それぞれの土地柄、会社の性格、  
そして会社をリードする人物の性格、  
マーケティング戦略……。  
これは、その個性的な活動で  
地域に生きる会社のドキュメント。



Yoneyama Shigeru | tatsumi planning

00棟の受注を掲げる。  
こうした事業展開を見て感じる  
のは、なによりもそのスピード感  
である。それを支えているのは、  
面倒見のよさと人を引き付けるカ

リスマ性、そして明確な目標を掲  
げて突っ走る姿勢だろう。その勢  
いの渦に人々を巻き込み、目標を  
実現させていくなかで信用を勝ち  
得ていく。不況の最中にも踏ん張

米山 茂（よねやま しげる）／1969年神  
奈川県生まれ。神奈川県立中沢高等学校卒業  
後、アパレル関連会社、設備メンテナンス会  
社勤務を経て、水まわり設備取り付け工事の  
職人の道へ。91年タツミ企画創業。96年有限  
会社タツミプランニング設立（2001年株  
式会社に組織変更）。企業スローガンは「Life  
is Treasure（人生は宝物）」

**Data**



tatsumi planning

**(株) タツミプランニング**

本社所在地 神奈川県  
横浜市中央区相生町  
4-75 JTB YN  
馬車道ビル8階

電話 045(228)1227

代表取締役 米山 茂

会社設立 1996年

従業員数 38名

事業内容 住宅新築事業、  
リフォーム事業、  
ウレタン吹付け  
断熱事業

売上高 19億2000万円  
(2009年度 第13期)

URL www.tatsumi-  
planning.co.jp

ることができたのは、周囲の人々  
が、会社の、いや米山さん自身の  
さらなる伸び代を認めているから  
にちがいない。  
「社員はもちろん、まわりの関係  
者からもお客さんからも愛される  
会社になりたい。そのために行列の  
できる工務店をつくりたい」と言う。  
自社設計にこだわらず、設計事務  
所からの施工依頼や店舗のリフォ  
ームなどにも目を輝かせるのは、  
自分たちが取り込める新しい発見  
を貪欲に求めているからだ。

起業から20年。だがまだ41歳。  
米山さんの疾風のごときチャレン  
ジは、まだまだこれからが本番で  
ある。

\*フォームライトSLL現場で吹付け施工を  
する。ノンフロンの硬質ウレタンフォームの  
断熱材。吹付け後数秒で約100倍に発泡す  
る(BASF INOAC ポリウレタン株式  
会社の取り扱い商品)。



# 「竹原義二展 素の建築」

Yoshiji Takehara, Just as it is

大阪を拠点に設計活動を行う建築家、竹原義二氏の展覧会を開催します。竹原氏は、日本建築の空間作法や素材の扱いへの深い造詣に裏打ちされた巧緻な住宅作品で知られています。日本建築のなかにある「素」のままの構造美、素材美を現代の手仕事で実現すること——本展では、このような竹原氏の建築に対する姿勢を「素(そ)の建築」と題して紹介します。会場には400本の無垢の柱梁による架構空間が出現し、竹原氏の建築を体感できます。手描きの原図を多数展示するほか、氏の建築をすべて撮りつづけている絹巻豊氏の写真、および、これまでの作品を総覧する100分の1スケールの模型を展示します。 Photo by Yutaka Kinumaki



「住吉山手の家」

兵庫県神戸市／1993

「外室」を核に、さまざまな経路が設定された  
廻遊式住居。  
建築のもつ間合いを介して家族の関係を結ぶ。



「101番目の家」

大阪府豊中市／2002

コンクリートと木が絡みあう  
剥き出しの構造表現を実現した自邸。  
(44～49ページ「現代住宅併走」参照)

## 素の建築へ

文 竹原義二

建築設計を始めて30数年、現在までに150作の建築をつくってきました。人と人が出会い、何もない場所に建築が建ち上がるさまを「すべては無から始まり有に還る」という言葉に込めて事務所名を「無有建築工房」と名づけ、小住宅の設計からスタートしました。

18番目に完成した「粉浜の家Ⅱ」(1985)は狭小住宅の出発点となる住宅です。この時代はどんなに小さな住宅であっても都市に棲みつづける意義を考えていました。5軒長屋を切り取ってつくられたこの住宅は、過密化した都市で自然と建築が極限の空間のなかで融合し、共生することを追求した住宅です。私にとつては住宅とは何かということに社会に問いかけた最初の住宅であり、原点となったのだと思います。

その2年後、「塗屋造の家」(87)を完成させます。ここでは敷地が3分割され、内部空間と外部空間が対峙し、自然を感じる中庭のあり方が主題となりました。また、光や雨、風といった自然が空間のなかで移ろう様相を受け止める素材のありさまを追い求め、無垢の木のもつ力量、塗壁の表現、紙のもつやわらかさの表現を試みた住宅です。現在も続く素材による建築表現の基本は、この住宅で培われたのだと思います。

90年代は社会における家族のあり方を問いつづけた時代です。そのなかで提案した住宅が廻遊式住居でした。「真法院町の家」「山坂の家Ⅰ」(ともに92)、「住吉山手の家」(93)へと展開していきます。限られた敷地のなかで内外が豊かな関係を保つよう立体的なレベル差をもって廻遊で

きる住まいのなかに、家族が共有できるとくに定まった用途をもたない空間「間」を埋め込むことを意図しました。建築のもつ間合いを介して、実際は距離を保っている家族が、つかず離れずの関係を結ぶために大切なことだと考えたのです。そして2000年代、「101番目の家」

(02)で不揃いの広葉樹の木とコンクリートの混構造でつくられた住宅へと回帰しました。自邸であるこの建築は、住宅とは何かということであらためて考える契機になりました。住まいにまつわるさまざまな要素を極限までそぎ落とした逃げのない建築。それは場所と建築、構造と空間、木とコンクリート……あらゆるものが1対1でぶつかりあうことで実現しました。ここでは都市のなかで、剥き出しとなりぶつかりあう緊張感そのものが、建築の表現となったのです。

展覧会では、今日までつくりつづけた作品の手描きの原図と全150作品の模型を展示します。これらは一作一作、ただひたすらに場と建築、人と建築の素のありさまを追い求めて生み出された、ものづくりのありのままの姿です。

事務所をスタートさせてから30年余り。そのあいだに、私たちを取り巻く環境は徐々に変化し、つくり出す建築のバリエーションも増えました。しかし、どのようなスケールの建築においても、住宅を出発点としたものづくりの姿勢は変わらず、現在も一作一作に取り組んでいます。ギャラリー・間の会場を巡るとき、建築と向きあう素のままの意志を感じ取っていただけることを願っています。



## 次回予告

デイヴィッド・アジャイ展  
「OUTPUT」

タンザニア出身で、現在ロンドンを拠点に活動する建築家デイヴィッド アジャイ氏は、現代建築界において、アフリカ出身で世界的な地位を確立している数少ない建築家のひとりです。アフリカ大陸の伝統的文化や風土に培われた豊かな表現力を現代的な素材と融合させ、シャープで力強い作品をつくりつけています。その活動は英国のみならず世界各地に広がり、アメリカ、ロシアなどでも大規模な公共建築を手がけています。日本初となる本展覧会では、アジャイ氏の最近の代表作を建築模型と写真、ドローイングによって紹介します。

会期 2010年7月8日(木)  
～9月18日(土)  
講演会 7月8日(木)18:30～  
津田ホール  
(東京都渋谷区千駄ヶ谷)  
参加方法 事前申し込み制  
詳細はギャラリー 問web サイトをご覧ください。

## ギャラリー・間

所在地 東京都港区南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル3階  
電話 03(3402)1010  
ファクス 03(3423)4085  
開館時間 11:00～18:00  
(金曜日のみ11:00～19:00)  
休館日 日曜日 月曜日 祝日および  
展示替え期間 夏期休暇  
年末年始  
入場料 無料  
アクセス ▶東京メトロ千代田線  
「乃木坂」駅下車  
3番出口徒歩1分  
▶都営地下鉄大江戸線  
「六本木」駅下車7番出口  
徒歩6分  
▶東京メトロ日比谷線  
「六本木」駅下車徒歩7分  
▶東京メトロ銀座線 半蔵門線  
都営地下鉄大江戸線  
「青山一丁目」駅  
下車徒歩7分



Yoshiji Takehara

## 竹原義二

たけはら・よしじ／1948年徳島県生まれ。71年大阪工業大学短期大学部建築学科卒業後、大阪市立大学富樫研究室を経て、石井修／美建・設計事務所勤務。78年無有建築工房(むうけんちくこうぼう)設立。2000年より大阪市立大学大学院生活科学研究科教授。おもな受賞に、84年渡辺節賞(「延命湯」)、96年村野藤吾賞(「鴻ノ巣の家」)、97年関西建築家大賞(「宝山町の家」)、「山坂の家Ⅱ」「広陵町の家」、99-01-02-07年日本建築学会作品選奨(「東広島の家」「土と陶の工房 美乃里」「海椿葉山」「松茂町第二体育館」)、04年木の建築賞(「101番目の家」) JCDデザイン賞奨励賞(「SOBRIO GARDEN」)、08年こども環境学会賞(「あけぼの学園南楓亭」)、09年菅原義信賞(「豊崎長屋」)など。著書に「無有」(07年、学芸出版社)がある。



「大川の家」

福岡県大川市／2009

80種類の不揃いの材木を巧みに使い分けることによって木のもてる魅力を最大限に引き出した。

TOTO出版のお知らせ



## TOTO出版 20周年を記念して 新刊5冊を 各2000円 で発行!

(+税)

book  
1



村野藤吾  
建築案内

編/村野藤吾研究会  
体裁/B5判変型  
ソフトカバー・344ページ

book  
2



YET  
HIROSHI HARA

著/原広司  
体裁/B5判変型  
ソフトカバー・336ページ

TOTO株式会社の文化活動の環として1989年にスタートしたTOTO出版は、おかげさまで2009年に20周年を迎えることができました。「都市・水・人」をキーワードに、建築・デザイン・生活文化を中心として20年間で300冊余りの書籍を刊行し、累計発行部数は200万部を超えました。長年にわたりTOTO出版の活動を支えてくださったみなさまに感謝の心を込めて、20周年記念出版と題し、新刊5冊を各「2000円+税」で発行いたします。

第1弾は「村野藤吾建築案内」。クラシシズムからモダニズム、さらには和風まであらゆる建築様式を柔軟に取り込み、独特の世界観を構築した偉才、村野藤吾の建築ガイドブックです。没後25年に合わせて出版した本書は、氏の主要135作品を紹介し、見学可能なものには地図を付け、研究者によるコラムも織り交ぜて紹介しています。

第2弾は「YET HIROSHI HARA」。「JR京都駅ビル」や「札幌ドーム」を手がけた建築家・原広司氏の「イエット=未完」の建築ばかり40作品を紹介する作品集です。デザインの鍵となる100のキーワードとビジュアルを交錯させた紙面からは、原氏の構想力がダイレクトに伝わってきます。

第3弾は「杉本貴志のデザイン発想一発酵」。「ハイアットホ

セラのお知らせ



cera trading news

「CERA  
総合カタログ  
2010」  
を発行しました

セラトレーディングでは、2010年度の新商品を掲載した「CERA 総合カタログ2010」を発行しました。フィリップ・スタルクのデザインによるキッチンシンク「STARCK K」や、いものホーローバス「CERA ORIG-

INAL COLLECTION」など、スタイルのある商品を多数ご用意しております。カタログのご請求は、セラトレーディングホームページ、または電話・ファクスにてお申し込みください。

2010

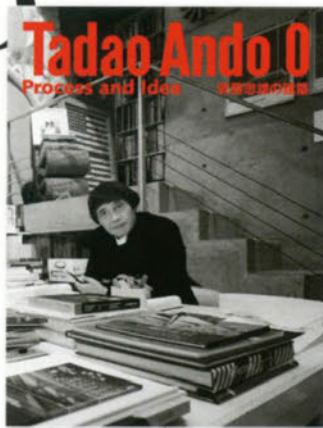
CERA 総合カタログ 2010

TOTOからのお知らせページです。イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくとお役に立つ情報を心がけています。合わせてご注目ください。

New Release

book

5



安藤忠雄の建築 0  
Tadao Ando 0  
Process and Idea

著/安藤忠雄  
体裁/B5判変型・ソフトカバー・320ページ

book  
4



磯崎新の建築・美術をめぐる  
10の事件簿

著/磯崎新 新保淳乃 阿部真弓  
体裁/菊判  
ソフトカバー・324ページ

book

3



杉本貴志のデザイン  
発想 | 発酵

企画・構成/杉本貴志  
文/中野照子  
写真/杉本貴志 白島英雄  
体裁/B5判変型  
ソフトカバー・396ページ

「第4弾は『磯崎新の建築・美術をめぐる10の事件簿』。知の巨人・磯崎新氏が対談相手に新進気鋭の美術史研究者を迎え、ルネサンス以降の500年の歴史から建築・美術に影響を与えた重大事件を10件抽出。それらの事件と現在の関係を紐解いています。政治、宗教、革命、産業、文学、映画……と、あらゆる分野を横断していく今までにない歴史書です。20周年記念出版の締めくくりは、『安藤忠雄の建築 0 Tadao Ando 0 Process and Idea』。既刊『安藤忠雄の建築』全3巻の番外編です。「0」と名づけたこの本では、安藤氏のこれまで未公開だったスケッチを数多く掲載します。建築の発想から完成まで、安藤氏はどんな思考をめぐらせていたのか、大量に描かれたスケッチによってそのプロセスをたどっていきます。いずれも骨太で読み応えのある本ばかり。この機会にぜひともご覧ください。

プレゼントします →  
Present!

同封のTOTO通信アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で、各2名、計10名の方にご紹介した新刊本をプレゼントします。●締切/4月30日 ●当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。●お送りする書籍の指定はご容赦ください。

TOTO出版 → [www.toto.co.jp/bookshop](http://www.toto.co.jp/bookshop)

セラトレーディング

●所在地/東京都港区南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル  
1階 地下1階  
●電話/03(3796)6151  
●ファクス/03(3402)7185  
●営業時間/10:00~18:00  
●定休日/日曜日 祝日  
夏期休暇 年末年始

Bookshop TOTO

●所在地/東京都港区南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル2階  
●電話/03(3402)1525  
●定休日/日曜日 月曜日  
祝日「ギャラリー 間」休館中  
の土曜日 夏期休暇  
年末年始

TOTO出版

●所在地/東京都港区南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル2階  
●電話/03(3402)7138  
●ファクス/03(3402)7187  
全国の書店でお求めください。直営店 Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。



次号「TOTO通信」は2010年7月上旬発行の予定です。

アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線半蔵門線 都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

TOTO通信 2010年 春号 第54巻・第2号 通巻190号  
発行日:2010年4月1日 発行所:TOTO株式会社 コミュニケーションプライバ  
〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TEL.03(5451)1131



## TOTO NEW MATERIAL

### 静かなる存在感

毎日の暮らしの中で、主張しすぎず、さりげなく、使う人の気持ちにそっと寄り添う。  
高い品質と性能を備え、空間表現を乱さない。  
空間の創り手の、使い手のイメージーションを触発する「素材」としての水まわり設備。  
それが、TOTOの目指す水まわり商品です。



この情報誌には植物性大豆由来の印刷インク「SOYINK」を使用しています。



洗面器(クリスタル)+洗面水栓 NEOREST SERIES /LE 2009年度 redden プロダクトデザイン賞受賞

商品についての技術的なお問い合わせ

TEL:0570-01-1010 受付時間:平日9:00~18:00/土・日・祝10:00~18:00(夏期休暇・年末年始を除く) URL:www.com-et.com

# TOTO

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。  
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999  
\*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、  
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp)をご覧ください。